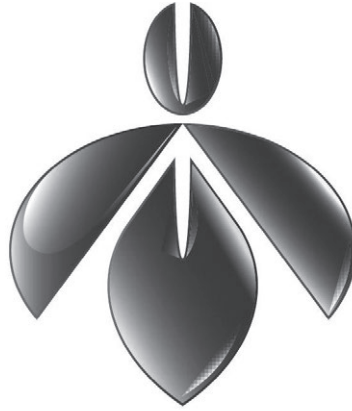


魅力あふれる大学づくり関連事業

令和6年度
学生自主企画研究
事業報告書



愛知県立大学
教育支援センター

目 次

事業報告	1
〈学生自主企画研究成果レポート〉	
1 名古屋市発達障害啓発プロジェクト	
－発達障害やその疑いのある社員への対応事例－	5
田村 優奈グループ	
2 あしもとから伝える地域の魅力	
－街道の有用性と身近な歴史－	15
松村 彩楓グループ	
3 沖縄の若年女性に対する妊娠・子育て支援の取り組みと課題	
－青年期におけるアイデンティティの確立と「キャラ」形成に着目して－	23
山田 紗愛グループ	
4 大学生を対象としたストレス課題の現状把握と	
改善に向けたカウンセリングシステムの構築	37
我妻 信実グループ	
5 愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒストリー実践	
－文化財所蔵者・地域博物館・地域住民との連携－	55
笠井 大稀グループ	
参考資料	67

ごあいさつ

教育支援センター長 菊池 好行

ポスト・コロナ2年目ということで、以前の日常が徐々に戻りつつあることをありがたく実感した年でした。ただし感染症の流行はパンデミック以前から存在しましたし、現在も続いているので、依然として感染防止対策を講じる必要はあります。本学でも実のところ、対面授業を基調としつつ、ここ数年で学んだオンライン授業を併用する、新たな日常を迎えているというべきかもしれません。今年度の学生自主企画研究・活動も昨年度と同じく、かつての形式に近づきつつ、適宜録画する形で開催いたしました。

学生自主企画研究・活動は、学生の皆さんが自ら見出した問題意識に基づいてグループで企画・実施する研究や活動に、大学が研究費を補助するものです。今年度は、地域連携テーマ、多文化共生テーマ、自由テーマの3区分で募集を行ったところ、計7件の応募が学部生・大学院生からありました。いずれも自由な発想にあふれた企画で、選考に悩みましたが、書類・公開ヒアリングを行い最終的に5件採択しました。内訳は多文化共生テーマが1件、地域連携テーマが1件、自由テーマが3件でした。興味深いことに、これらのテーマはいずれも地域とかかわり、人々のケアに関するものでした。研究・活動を通じて、キャンパスを超えて社会とのつながりを求める学生たちの意欲が表れていると感じました。

研究の進捗状況を報告する中間発表会を10月下旬に、最終発表会を1月に行いました。フィールドワークなどが計画通りに進まなかったために、研究方法や計画そのものを修正したグループもありましたが、学生の皆さんはそういった困難を創造的に乗り越え、素晴らしい成果を出してくれました。また中間発表会では、学生グループの発表に先立って、WWL（ワールド・ワイド・ライニング）コンソーシアム構築支援事業の一環として、愛知県立千種高等学校の生徒さんによる中間発表が行われ、有意義な高大連携となりました。

さて、本事業の実施にご支援、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。川畑博昭学長、服部淳子・糸魚川美樹両副学長、各センター長、学部長を始めとする教員の皆様には、選考から中間発表、最終審査に至るまで、研究内容に対する厳正な評価と貴重なご助言をいただきました。奥田隆史教養教育センター長、愛知県立千種高等学校の袴田陽士教頭には、本学と同校との連携にご尽力いただきました。社会福祉学科松宮朝教授には、スキルアップ講座を実施していただきました。柴田陽一副センター長には発表会での司会進行をお引き受けいただきました。地域連携センターのご協力により最終報告会を録画し、その動画を愛知県教育委員会にご提供いただくとともに同センターが主催する愛県大アカデミックデイ（Day2）にてオンデマンド配信していただきました。様々な形で研究を支えてくださったグループの指導教員の皆様、また、地域の皆様をはじめ研究に協力してくださったすべての方々にも御礼申し上げます。

最後に、この事業は参加してくださる学生の皆様あつてのものです。今年も積極的に応募し、意義深い研究を実施してくださった学生の皆様に満腔の賛辞をお贈りします。

2024年度事業報告（概要）

1. 事業計画

(1) 内容

学生の自主性、創造性を刺激することにより、勉学意欲の向上を図るため、学生自主企画による研究・活動プロジェクトを公募し、採択されたものに対して、研究資金を助成する。その研究・活動成果の発表会を開催し、グループの調査成果を学内で共有する。

(2) 申請者

愛知県立大学生、同大学院生で構成された研究グループは、代表者を含む正規構成員(3名～10名)と協力者(0名～人数制限なし)とする。同一人が、正規構成員として複数グループに属することはできない。本学専任教員1名の推薦が必要。推薦教員はその研究グループのアドバイザーに就任する。

(3) 研究テーマ

● 地域連携テーマ

愛知県内又は愛知県近傍の地域の歴史や風土に関する研究・調査や地域活性化や交通機関の利用促進など、地域の課題解決に繋がる研究・調査テーマ

● 多文化共生テーマ

在住外国人の医療、福祉、教育、雇用、言語、文化の諸問題など愛知県内又は愛知県近傍の地域のグローバル化に伴う地域社会の多言語・多文化化の進展に伴う課題などの研究・調査テーマ

● その他、自由テーマ

上記テーマによらず、自分たちの関心に応じた自由な研究・調査テーマ

(4) 助成金額

最大 250 千円／件（研究内容等により調整あり）

(5) 助成件数

6 件（採択グループ 5 件）

(6) 採択方法

第一次審査 提出書類による審査。

第二次審査 第一次審査合格グループに対して公開ヒアリングを行い、教育支援センター運営会議で決定。

(7) 研究期間

2024 年 6 月 3 日（月）から 2025 年 1 月 21 日（火）まで

(8) 研究成果公開

研究終了後、研究発表会を開催する。

2. スケジュール

4月22日	学生自主企画募集開始 UNIPAにて応募用紙などの書類を掲示 募集期間：4月22日(月)～5月10日(金)
5月10日	募集締め切り
5月13日	第一次審査 応募：8件（うち、地域連携テーマ4件、多文化共生テーマ1件、自由テーマ2件、地域連携・多文化共生に跨るテーマ1件） 教育支援センターにおいて第1次審査を実施。その結果、5件を第二次審査の対象とすることを決定。（5月14日に審査結果を発表）
5月22日	第二次審査（公開ヒアリング） 15:30～15:45 H005 教室にて公開ヒアリングを実施。参加：5チーム 第二次審査における役職者の審査結果をもとに、教育支援センターにて最終選考を実施。審査の結果、研究テーマ5件すべてを採択。
5月24日	2024年度 研究助成金採択グループを公表。 グループ代表学生に取扱説明資料を配付
6月12日	学生自主企画研究関連講座・研究スキルアップ講座 12:50～14:20 H201 教室にて「社会調査の実践的スキル」（松宮 朝教授（社会福祉学科））講座を開催。同時に研究助成金説明会を開催。
10月23日	中間報告会 13:00～14:30 H005 教室にて、中間発表会を開催（ハイブリッド形式）。 愛知県立千種高校生徒による探究活動報告・ポスター発表会を合同開催。
1月22日	最終研究発表会、審査終了後に表彰式 13:30～15:30 H005 教室にて、研究発表会を開催（ハイブリッド形式）。 動画録画は、地域連携センター主催の愛県大アカデミックデイ(Day2)にオンデマンド配信すると共に、愛知県教育委員会に提供。
1月31日	成果レポート、実施報告書及び出納簿を提出。

3. 経過の詳細

□本事業も18年目となり、本学の特色ある取り組みの一つとして学内で位置づいている。

今年度は採択件数の上限を6チームとし、1チーム当たりの助成金額を25万円とした。

□（うち地域連携テーマ分として、地域連携センターより1チーム分の金額の助成を受けている。）

□応募要領の「審査基準」は、①「研究」または「地域や社会に貢献する取り組み」であること、②実行可能性、③プレゼンテーションとし、この基準に従い、第一次審査、第二次審査(公開ヒアリング)を実施した。

□過去 5 年間の応募件数、採択件数の推移は以下の通りである。

年度	応募件数	第一次審査合格件数	採択件数
2020 年度	中止		
2021 年度	11 件	11 件	8 件
2022 年度	6 件	6 件	6 件
2023 年度	9 件	9 件	6 件
2024 年度	7 件	5 件	5 件

□第一次審査は書類選考とし、応募した 7 件中 5 件を合格とした。審査は教育支援センター運営会議構成員が、①「研究」または「地域や社会に貢献する取り組み」、②実行可能性の 2 項目について採点した。

□第二次審査は公開ヒアリングとし、審査は募集要項に明記の 3 基準を基に①「研究」または「地域や社会に貢献する取り組み」、②「自主的な問題意識」、③研究計画、④予算の使い方と研究計画との関連、⑤プレゼンテーション、の 5 基準を各 4 点で採点、合計 20 点満点で審査員（学長、副学長、学部長、センター長、計 14 名）が採点した。採点結果に基づき 5 件の採択を決定した。

□学生自主企画研究関連講座・研究スキルアップ講座として、採択されたグループの構成員を対象に、松宮先生(社会福祉学科教授)の「社会調査の実践的スキル」を開催した。

□中間報告会は愛知県立千種高校生徒による探究活動報告・ポスター発表会と合同で開催した。

□最終研究発表会は、基本は対面形式での開催としてグループ構成員は都合のつく限り会場に参加した。ハイブリッド形式で実施し、録画動画は地域連携センターが主催する愛県大アカデミックデイ(Day2)にオンデマンド配信すると共に、愛知県教育委員会に提供した。いずれのグループもしっかり準備されたプレゼンテーションで、質疑も活発に行われた。

□採点は「研究内容」、「プレゼンテーション」についてそれぞれ 10 点満点とした。採点者は役職者の教職員とした。得票数(平均得点)により金賞と銀賞を選出、川畑学長から賞状および副賞の図書カード(金賞 2 万円・銀賞 1 万円)が授与された。

賞	代表者	研究テーマ
金賞	松村 彩楓 (歴史文化学科)	あしもとから伝える地域の魅力ー街道の有用性と身近な歴史ー
銀賞	笠井 大稀 (歴史文化学科)	愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒストリー実践ー文化財所蔵者・地域博物館・地域住民との連携ー

学生自主企画研究成果レポート

学生自主企画研究・活動 成果レポート

研究課題	名古屋市発達障害啓発プロジェクト —発達障害やその疑いのある社員への対応事例			
研究代表者	教育福祉学部 社会福祉学科 氏名 田村優奈			
グループ 構成員	正規構成員 社会福祉 4年 田村優奈 社会福祉 3年 亀井弥賢 社会福祉 4年 内藤麻友 社会福祉 3年 佐藤愛歌 社会福祉 4年 田中彩葉 社会福祉 3年 鈴木佳奈 社会福祉 4年 川口紗季 社会福祉 3年 原田宗健 社会福祉 4年 渡邊里佳 社会福祉 3年 樋口晶乃 協力者 社会福祉 4年 野田愛佳 社会福祉 3年 國分健太郎 社会福祉 4年 平松鈴菜			

1. 研究背景

1-1 名古屋市発達障害啓発プロジェクトについて

名古屋市発達障害啓発プロジェクトとは、社会の多様な主体と連携・協力し、発達障害のある方の個性や多様性を理解し支えていく社会を目指すプロジェクトのことである。今年度は、4月2日の世界自閉症啓発デーを契機として中部電力 MIRAI TOWER のブルーライトアップをはじめとして、100種類のアールブリュット缶マグネットの製作や商業施設でポスター掲示等を行っている。

障害分野を主に学ぶゼミ生として、企業が発達障害やその疑いがある社員に対してどのような対応をしているのかが明らかになっていないことに問題を感じた。そのため、これらの点を明らかにし、制度が整っていない企業や施設に伝えることで、より当事者を理解し、支えていく社会を目指せると考えた。また、働きやすい環境を整備するきっかけとなり、就職を考えている当事者にも貢献できると考えた。そのため、本プロジェクトを高柳先生に紹介してもらい参加する運びとなった。



1-2 発達障害者の採用状況

発達障害を持つ方の働き方としては、一般就労と障害者雇用での就労の2種類ある。

一般就労については、自らの障害を会社にカミングアウトするか否かは個人の考え方によって異なる。第308回NRIメディアフォーラムによると、ASDの診断のある方の約6割、ADHDの診断のある方の約8割が一般就労で就業しているというデータがある。

次に、障害者雇用についてである。障害者雇用とは、障害者手帳を持っている方のための特別な雇用枠である。発達障害のある方の場合、精神障害者保健福祉手帳や、知的障害を伴う場合は療育手帳を取得することができる。

企業に対する法定雇用率は、現在2.5%であるが、2026年には2.7%に引き上げられる予定である。また、障害者雇用促進法の改正により、2018年4月から発達障害を含む精神障害者が法定雇用の算定基準に加えられるようになった。その結果、発達障害のある方の雇用数は直近10年で6.8倍に増加している。厚生労働省が実施した「令和4年 生活のしづらさに関する調査」によれば、医師から発達障害と診断された方の推計値は87万2千人とされており、そのうち従業員規模が5人以上の事業所に雇用されている発達障害の方の推計値は約9万1千人であることが分かっている。また、障害者雇用の促進と安定を図るため、特別な配慮を行う子会社として特例子会社と呼ばれる企業で働く者もいる。

ただし、発達障害の傾向があるものの診断が下されない、いわゆる「グレーゾーン」に該当する方は手帳を申請することができない。発達障害が理由で働きたくても働くことができない人の数は、統計で示されている以上に多いと推測される。そのため、発達障害のある方の雇用数は増加していったとしても、こうした方々の強みや特性を理解した職場環境を整備する必要がある。

1-3 発達障害の方に必要とされる合理的配慮

発達障害のある方には多様な特性があり、それにより生活の場や職場などで困難を抱えることがある。しかし、特性に応じた合理的配慮をすることによって、発達障害のある方も能力や強みを生かして社会で活躍することができる。以下、困難のタイプごとに分け、一般的に必要とされている合理的配慮を整理する。

初めに、コミュニケーションの困難さを抱える人は、言語化することや言葉の意味を正確にくみ取ることが苦手であるため、何かを伝える時にはメモなどを用いて視覚的に分かりやすくすることや比喩表現を使わず、具体的に説明するなどの配慮が必要である。また、話を聞くときは途中で遮らないことや、あらかじめ相談窓口となる人を決めておき相談しやすい環境をつくるなどの配慮が必要となる。

次に、時間の捉え方の困難さを抱える人は、スケジュール管理や効率の良い作業が苦手であるため、あらかじめスケジュールを立てたり、前日に翌日のスケジュールと一緒に確認したりして見通しを立てて行動できるようにすることや、スケジュールを可視化するなどの配慮が必要となる。

続いて、判断力や理解力の困難さを抱える人は、自ら判断することや、一を聞いて十を知ることが苦手であるため、曖昧な表現を避けて数字や期限などを具体的に指示するといった期待値を下げた丁寧な説明や、先のことは伝えず、一工程ごとに説明するといった配慮が必要となる。

続いて、五感に過敏があることによる困難さを抱える人は、五感の刺激に敏感で集中できなかったりストレスを感じたりするため、気の散りにくい座席の配置や静かな環境を用意するなどの配慮が必要となる。

続いて、新しいことや変化への対応に困難さを抱える人は、予定の変更や新しいことに対して強い不安を感じ、臨機応変な行動が苦手であるため、予定の変更は早めに伝えることや、変更の理由を丁寧に説明するといった配慮が必要となる。

最後に、認知の偏りやズレからくる困難さを抱える人は、こだわりが強く自分のやり方に固執したり、ルールを守ることが苦手であったりするため、その場におけるルールを丁寧に説明し、ルールが必要な理由を理解できるように配慮する必要がある。

以上のような特性や困難のタイプに応じた合理的配慮をすることで、発達障害のある方も職場などの環境に適応でき、力を発揮することができると考えられる。

2. 2024年度の活動概要とスケジュール

2-1 活動内容

4月から、名古屋市発達障害啓発プロジェクトに協賛している企業を中心にインタビュー調査のアポイントメントを取り始めた。6月に質問票を作成し、インタビュー調査を開始した。インタビュー調査の依頼メールを送った総企業数は37社で、書面回答を含めインタビューにご協力してくださった企業は12社であった。14社はお断りのメールが返ってきたが、その理由としては、「障害者雇用について勉強中のため」「障害者雇用の前例がないため」というものだった。

インタビュー調査を行った6月から9月にかけては、インタビュー結果をメンバー内で共有し、データを分析するとともに、質問票の改善を行った。また名古屋市発達障害啓発プロジェクトに協賛している企業のみでは、調査数が不足していたため、日本橋ニューロダイバーシティプロジェクトに協賛している企業や就労移行支援に特化した団体や特例子会社など範囲を広げて調査を続けた。

10月から1月にかけてPowerPointを用いて動画作成を行い、1月にはインタビュー調査にご協力いただいた企業に完成したDVDと謝礼の送付を行った。

2-2 活動目標

この企画では、発達障害やその疑いがあっても就労できることを多くの人に知ってもらうことを目標とした。そのために発達障害やその疑いがある社員がいて、そのことが業務上の困難を生じている場合、企業がどのような対応をしているのか、インタビュー調査を行った。今後はインタビューの調査結果をもとに「対応事例集」を動画形式で作成し、希望する企業や施設、学校に貸し出し等を行うことを想定している。

2-3 調査方法

名古屋市発達障害啓発プロジェクトに協賛している企業様を中心に、アポイントメントを取り、インタビューを行った。また、名古屋市内にこだわらず、本研究の趣旨を理解し、ご協力いただける企業様がいれば他県も含めインタビューを行った。

2-4 スケジュール

活動のスケジュールは以下の通りである。

4月から5月	企業にインタビュー調査の依頼、質問票の作成
--------	-----------------------

6 月	インタビュー調査の実施、調査結果の共有・分析
7 月から 9 月	質問票の改善、調査対象の拡大及び実施
10 月	調査結果の共有、分析
11 月から 1 月	動画作成、ご協力いただいた企業へ完成物と謝礼の送付

3. インタビュー調査

3-1 インタビュー調査概要

対面でのインタビューまたは書面回答でご協力していただいた 12 社の企業に以下のような質問をした。

〈全社共通の質問〉

- ①発達障害やその疑いのある社員はいるか
- ②発達障害を持つ社員に対して、どのように対応しているのか
- ③実際にどのような工夫・配慮を行っているか
- ④社員に発達障害についての知識はあるか、研修などで知識を取り入れる機会はあるか
- ⑤発達障害であることを職場に伝えるか悩んでいる人もいると思うが、カミングアウトの必要性はあると思うか
- ⑥どの程度の合理的配慮をすることができますか
- ⑦本人は無自覚だが、周りから見て発達障害の疑いがあると感じる時、どのように対応する必要があると思うか

〈追加で答えていただいた質問〉

- ⑧発達障害に限らず、多様性のある働きや個人の特性に配慮した職場環境づくりについて何か取り組んでいることはあるか
- ⑨発達障害のある方の雇用に関して、他者の事例や取り組みについて調査したことはあるか
- ⑩障害者雇用で大変だったこと
- ⑪発達障害をカミングアウトすることでキャリアアップに影響はあるか（

〈就労をサポートしてくれる機関に対する質問〉

- ⑫就職が難しい職種や理由は何か
- ⑬企業との連携による教育の取り組みや成功事例はあるか

- ⑭発達障害を持つ社員とのトラブルはあったか
- ⑮企業が不安に思うことにどのように対応しているか

3-2 インタビュー結果

上記の質問に対して、ご協力していただいた企業からの回答は以下の通りである。

- ①「いる」とはっきり答えた企業は特例子会社を除いてなかった。
- ②障害者手帳を持っているとケアや対処ができるが、持っていない場合は会社として対応することが難しい。

中間面談を通して発達障害の方の業状況を振り返り人に評価されることで、自分で気づけなかった可能性を再確認できる機会を作る。

- ③話を脱線せずにショートカットして進めたいところだが、本人に合わせて話を聞く姿勢を大切にしている。

アセスメントを通して個人の特性や行動の背景などを知る。

- ④人事部門に発達障害に関する知識が集中する傾向があるため、人権啓発研修（障害、ハラスメント）のトピックの一つに発達障害を設定するなど、社内全体へ障害に関する知識を取り入れ理解を深められるよう努力している。

障害のある社員とともに働くことを目指したハンドブックを全従業員に配布することで具体的な対応方法の道しるべとしている。

- ⑤基本的にして欲しいが、自分自身が困っていなければする必要はない。周知することでコミュニケーションのトラブルが減り、本人の生産性が上がる。その際は、コミュニケーションをとる必要がある人のみに伝え、どんなことでも合意を取ることを意識している。

- ⑥本人と入社時にどこまで配慮できるかというラインをお互いに確認している。遅刻は何日まで OK など明確には決めていないが、声掛けは来客対応中や電話対応中以外は OK で、すぐに対応することが難しい場合は、「あとで声を掛けます」と伝えている。

- ⑦そういった方は周りを見て学ぶことができていない場合が多い。そのため、第三者の目を見た視点を伝えたり、感情の出し方において「こういう風に伝えるとよかったね」と伝えたりする。また、トラブルや衝突が起こった際には、なぜそのようになったのかを聞くことを意識している。

- ⑧精神障害がある方や騒がしい場所が苦手な方、一人で集中したい方のために集中スペースという少し暗くて区切られたスペースを提供している。また、本人の状況を見たり、ジョブサポーターが指名したりしてチームの変更を行っている。

- ⑨他の特例子会社と年に数回交流することがある。採用に関して何を重視しているのかのヒアリングや日々の支援方法で困っていることを共有している。
- ⑩メンバー同士のトラブルや何回注意をしても遅刻するなどの問題を指導することが大変だった。
- ⑪本人が持っている資質的に難しいかもしれないが、キャリアアップしたい場合は制度設計が必要である。
- ⑫頻繁にコミュニケーションを必要とする職種は難しい場合があるが、理解があればほとんどの仕事に就ける。企業に協力してもらい、人材育成の観点からサポートを行うことが重要。
- ⑬企業から課題をもらい、デザインや情報発信など実際の業務に取り組む経験を通じて、学んだことを実践で活かす能力が身についた。このように、実践的な経験と企業との連携を通じて、参加者に責任感やプレッシャーを持たせ、結果として大きな成果を挙げている。
- ⑭極端なトラブルはないが、発達障害の方の自己主張が激しいという特性から周囲とのコミュニケーションで摩擦が生じることがある。企業側の意図を理解してもらうための工夫が必要であり、企業の思っていることをかみ砕いて伝えている。ただし、障害特性でできない事もある反面、家犬を積めば出来ることもある。
- ⑮本人とのコミュニケーションを通して、その人に会ったオーダーメイドの対応をする。

3-3 インタビュー結果の分析と考察

ほとんどの企業が発達障害者を雇用しておらず、はっきりと答えられない状況が見られる。これは、医師に診断されていない場合や障害者手帳を持っていない場合に、企業が具体的な対応をしづらいという問題を示している。一部の企業では、中間面談などを通して発達障害のある方の業務状況を把握し、フィードバックを与えることを実践して個人の特性に応じた対応が進めていたり、個々の特性に応じた集中スペースの提供やアセスメントによる個人特性の理解を深めることが進められており、発達障害がある方が働きやすい環境を作る工夫がなされている。発達障害に関する知識の普及については、人事など一部の部門に偏っている傾向があるが、全従業員向けにガイドブックを配布するなど対策を講じている企業もある。このような取り組みは、社員間のコミュニケーションを円滑にし、相互理解を深めることに繋がると考える。

発達障害のカミングアウトについては、必須ではないが推奨する意見が多く見られる。カミングアウトによって、障がいのある社員に対する対応の幅が広がり、全体の生産性が向上するという意見があった。ただし、伝える相手や内容に関しては、個人の意思と合意形成を重視する必要がある。他の特例子会社と情報

交換を行うなど、知見の共有による問題解決を図る企業も見られ、同業他社の取り組みや成功事例を学ぶことで具体的な支援策に生かすことができると考える。

これらのインタビュー結果から発達障害のある社員に対する企業の対応は多様であり、改善の余地があると考えられる。合理的な配慮や個別の対応は進んでいるものの、知識や意識の普及、カミングアウトのサポートに関する取り組みは、さらに強化していくことが必要である。



4. まとめ

インタビューを進めていく中で、私たちの予想に反し、インタビュー可能な企業が少ないという現実直面した。名古屋市発達障害啓発プロジェクトに協賛している企業も、17社中13社からお断りの連絡をいただき、承諾いただいた企業の中でも、自社がプロジェクトに協賛しているということを認識していない企業も存在した。このようなことから、広報的な意味での参加が多いのではないかと予測された。また、プロジェクトへの協賛の有無にかかわらず、多くの企業から「前例がない」、「現在勉強中である」という声が聞かれ、そのような理由でのお断りの連絡が大半を占めた。しかし、インタビュー結果から、対応に試行錯誤している企業も多いことに気が付いた。また、「人事に積極的に相談してほしい」という声も聞かれ、前向きな企業が多いことも分かった。そのため、本研究で作成する事例集は多くの企業にとって役に立つと考えられる。

加えて、企業側の「人事に相談してほしい」、「このように環境を整えることも可能である」という声を当事者の方々に届けること、就労をサポートする機関が存在することを伝えることが当事者にとってもメリットとなると考える。

事例集の動画を届けることで、企業、当事者双方にとっての理解が深まり、お互いに考え、歩み寄る機会をもたらし、よりよい社会となることを願う。

■YouTube の URL

<https://youtu.be/4FaMwzNbuxc>

5. 参考・引用文献

- ・名古屋市発達障害啓発プロジェクトホームページ 名古屋市子ども青少年局
子育て支援部子ども福祉課
- ・草の根ささえあい合いプロジェクト
- ・厚生労働省「障害者差別解消法福祉事業者向けガイドライン」

6. 謝辞

本研究を遂行するにあたり、多くの方々からのご支援、ご協力を賜りました。指導教員の教育福祉学部社会福祉学科高柳瑞穂先生には、本研究の発案から熱心にアドバイスをいただき、研究の実施にあたり適切なご指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

また本研究におけるインタビューに快く同意し、ご協力くださった企業や団体の皆様には、成果物の材料となる貴重なご経験や考えをお話していただきました。

本研究の制作に尽力して下さったすべての皆様に心より御礼申し上げます。



学生自主企画研究・活動 成果レポート

研究課題	あしもとから伝える地域の魅力 —街道の有用性と身近な歴史—
研究代表者	日本文化学部 歴史文化学科 氏名松村彩楓
グループ 構成員	日本文化学部歴史文化学科 3 年 松村彩楓 日本文化学部歴史文化学科 3 年 片岡優美 日本文化学部歴史文化学科 3 年 中村優花

目次

- 1.はじめに
 - 1.1 研究背景及び研究目的
 - 1.2 研究概要
- 2.活動内容
 - 2.1 西尾市塩田体験館吉良饗庭塩の里での塩田体験
 - 2.2 「塩の道」をたどる実地活動
 - 2.3 「塩の道」における重要拠点の訪問
- 3.研究活動の成果物作成
 - 3.1 ブックレット作成
 - 3.2 ブックレット刊行
- 4.おわりに
 - 4.1 まとめ
 - 4.2 謝辞

1. はじめに

1.1 研究背景及び研究目的

愛知県には歴史的に重要な拠点多く存在する。特に「街道」という存在の歴史的意義は大きい。街道は現在でも使用されている道と重なる場所も多く、今を生きる人々に

とっても身近に感じやすい歴史実践が可能である。しかし私たちは現時点での愛知県内において、街道の歴史についての有用性を、歴史に触れていない一般の方々に対し、まだ十分に示せていないと考えた。そこで私たちは実際に街道やそこに関連する重要拠点に訪問し、街道の痕跡を見つけ、それを歴史に明るくない人々にも紹介することを目的とした。具体的な方法としては、古くから人が生きるのに欠かせなく、現在でも重要視されている「塩」を一つのテーマとし、愛知県でかつて塩を運ぶために使われていた街道「塩の道」を資料調査及び現地調査を行い、現在でも残っている街道及び塩の道の遺物や文化などを探り、それを小冊子の形式にまとめるというものである。研究の最終目的としては、作成した小冊子を、私たちが実際に調査に赴いた土地に関連する観光案内所や施設に配架の依頼を行い、そこに置かせていただくことによって、その施設に訪れた現地の人々ないし観光客の方々に手に取ってもらい、街道への理解を深めるきっかけにってもらうことにある。

1.2 研究概要

愛知県内における「塩の道」の調査を行い、調査結果を小冊子（ブックレット）形式でまとめ、関連地域の施設に配架した。

① 「塩の道」資料調査

愛知県の街道及び塩の道に関連する先行研究の調査や、過去の資料や旧版地形図を利用した塩の道のルート決定の実施。塩の道は愛知県内でも複数のルートや拠点があるとされていたが、その中でも今回は西尾市吉良吉田から岡崎市、豊田市足助を通り長野県根羽村までのルートを選択し、それを塩の道と定義づけた。

② 「塩の道」現地調査

決定したルートを実際に歩き、そこで見つけた歴史の痕跡（馬頭観音や地藏菩薩、道標など）を記録し、石仏に書かれた文字史料の解析などを行った。また、西尾市吉良吉田、岡崎市、豊田市足助、根羽村は塩の道の重要拠点であると考え、重点的に調査をした。

③ ブックレットの作成及び刊行

塩の道を実際に歩き調査した結果をブックレット形式の小冊子として刊行し、関連地域に配架をした。

2. 活動内容

2.1 西尾市塩田体験館吉良饗庭塩の里での塩田体験

塩の道ルート調査にあたり、私たちは塩が作られる起点を西尾市の吉良吉田であると定義した。西尾市塩田体験館吉良饗庭塩の里では塩作り体験及び施設内の塩の道関連の資料調査を行った。また、同施設の館長に私たちの活動内容をお伝えし、塩の道に関するお話を伺う機会を設けていただいた。塩田体験は、かつての人々が塩を作る際に

使用していた方法と近い形で行われた（図 1、2）。施設内現存資料については、実際にかつて使用されていた器具の展示やレプリカの展示がおこなれていた（図 3）。吉良饗庭塩の里における塩田体験及び現地調査は 7 月 28 日に行った。



図 1 塩田体験の様子
(2024 年 7 月 28 日撮影)



図 2 塩田体験の様子
(2024 年 7 月 28 日撮影)



図 3 かつて塩作りで使用されていた器具の展示（2024 年 7 月 28 日撮影）

2.2 「塩の道」を辿る実地活動

塩の道の具体的ルートを定義する際には、『愛知県歴史の道調査報告書 8 飯田街道足助街道』（愛知教育委員会 1992）、『愛知の歴史街道』（中根洋治 1997）を主に参考とし、旧版地形図と地理院地図を参照して詳細なルートを決定した。大まかなルートとしては、吉良吉田から岡崎市までは矢作川を水路で通ったと考えられるため、実際に陸路の街道として私たちが歩いたのは岡崎市から豊田市足助、そして長野県根羽村までのル

ートとなる。また、研究目的として、一般の人々にもこのルートを紹介するという目標を掲げていたため、実際に歩くことが困難な旧道があった際には、歩きやすい新道を使用した箇所が含まれている。街道調査においては9月26日、29日、10月20日、11月9日、10日の計5日間の日程で行った。

2.3「塩の道」における重要拠点の訪問

塩の道調査において、街全体が重要拠点であり重点的に調査が必要であると判断した岡市、豊田市足助、長野県根羽村の3地点では上記の日程とは別に個別の訪問日を設けた。

① 岡崎

岡崎市では、吉良吉田から矢作川を通り運ばれてきた塩を陸路で運ぶための起点として矢作川及び巴川の船着場である土場の調査を行った。岡崎市には塩座という塩を取り扱う際の特権を有した商業組織があったとされている。東海道にも通じた岡崎伝馬通りには塩座に関係する石彫があった(図4)。また、吉良吉田の饗庭塩がかつて使用されていたという記録が残っているカクキュー八丁味噌の味噌蔵見学を行い、塩の道の痕跡を辿った。岡崎市訪問は9月15日に行った。

② 足助

足助は三河地域から信州地域を結ぶ中継地点として栄えたとされている塩の道の重要地点である。塩問屋と呼ばれる塩を扱う店が明治期に栄えていた。足助では「足助塩」という碧南市や西尾市の饗庭塩などをブレンドして作られた塩が有名であり、塩との関係性が深く見て取れる。足助においては苺屋塩座、豊田市足助中馬館などを訪問し塩の道の痕跡を辿った(図5)。足助訪問は9月30日に行った。



図4 岡崎伝馬町における塩座の石彫
(2024年9月15日撮影)



図5 豊田市足助中馬館の外観
(2024年9月30日撮影)

③ 根羽村

根羽村は江戸時代から明治時代にかけて、三河地域と信州地域をつなぐ三州街道(塩の

道)の宿場として栄えた。村には馬頭観音や道標などが多く残されている。私たちは根羽村を塩の道を辿る実地調査の最終目的地として設定した。根羽村では中馬街道の痕跡である馬頭観音や道標が多く残されており、それらを重要な歴史史料として保存に尽力する地域の人々との交流を行った。根羽村に訪問した際には中馬街道連絡会に所属している方との交流をはじめ、根羽村に現存する塩の道及び街道の歴史的痕跡をご紹介していただいた。根羽村は12月26日に訪問した。

3. 研究活動の成果物作成

3.1 ブックレット作成

塩の道を実際に辿り、そこで発見した石仏や歴史の痕跡など、また、訪問先で調査した史料や交流した人々から聞いた話などを一冊のブックレットにまとめる作業を行った。ルート紹介については、実際に歩いたルートを地理院地図にトレースし歩いた中で発見した石仏や道標には印をつけ、読み手側にも実際に発見できるような形にした。また、岡崎市、足助、根羽村の3地点においては別途で「体験記」を設けてより詳細にその町の様子が伝わる形での作成を行った(図6、図7)。また、一般の方向けという目的の元、難解な歴史用語を避け、QRコードを読み取ることで実際に街道を歩いた様子が伝わる動画(図8)を見られるようにするなど、より歴史が身近に伝えられるような工夫を施した。



図6 ブックレットの誌面



図7 ブックレットの誌面



図 8 YouTube チャンネルの画面

→YouTube チャンネルのリンク

<https://youtube.com/@kaido-sanpo?si=wr7Zm9-1zNV2ibAG>

3.2 ブックレット刊行

作成したブックレットを、私たちが実際に歩いた塩の道に関連する地域の施設への配架依頼を行った。

現時点で配架依頼の快諾をいただいた施設は

- ・ 西尾市塩田体験館吉良饗庭塩の里
- ・ 西尾観光案内所
- ・ 岡崎城
- ・ 三河武士のやかた家康館
- ・ 株式会社カクキュー八丁味噌
- ・ いなぶ観光協会
- ・ 一般社団法人ツーリズム豊田
- ・ 豊田市博物館
- ・ 松平観光協会
- ・ 足助中馬館
- ・ 三州足助屋敷
- ・ 塩の道づれ家
- ・ 菰屋 塩座
- ・ 豊田市足助観光協会
- ・ 根羽村役場
- ・ 愛知県立大学

の 16 箇所である。

4. おわりに

4.1 まとめ

歴史をもっと身近に知ってもらおうという目的で、現在でも身近に感じることできる「塩」というテーマのもと、街道についての調査を行った。調査をしていく上で、歴史の痕跡を発見する面白さだけではなく、私たちの活動を知り、お話を聞いてくださった地域の人々との交流を通して新たに学びを得ることも非常に多かった。また、ブックレットの作成においては、一般の人から見てわかりやすいかという視点を常に持ち続けなければならない、読み手側の視点が必要不可欠であった。本活動を通して、歴史は歴史を学ぶ者のみで完結するべきではなく、歴史を身近に感じていない人々へ還元していくことが重要であると強く感じた。

4.2 謝辞

本活動にあたり、多くの方々にご指導をいただきました。

指導教員として調査時、ブックレット作成時など様々な場面で多くのご指導や助言をくださった日本文化学部服部亜由未先生に深く感謝申し上げます。

街道調査にあたり、私たちの調査活動及び聞き取り調査を受け入れてくださった各施設の方々、ブックレット配架依頼を快く受け入れてくださった皆様方に深く感謝申し上げます。

学生自主企画研究・活動 成果レポート

研究課題	沖縄の若年女性に対する妊娠・子育て支援の 取り組みと課題 -青年期におけるアイデンティティの確立と 「キャラ」形成に着目して-
研究代表者	教育福祉学部 教育発達学科 氏名 山田 紗愛
グループ 構成員	教育発達学科 中園 杏美 平井 楓花 吉田 彩乃

目次

第1章	研究の概要
1-1	背景
1-2	目的
1-3	方法
第2章	研究活動
2-1	子育て支援センター 南風（フェーヌカジー）
2-2	那覇市母子生活支援センター さくら
2-3	那覇市役所
第3章	考察・今後の課題
3-1	母親としてではない、個としてのアイデンティティの形成の困難さ
3-2	各施設の支援
3-3	沖縄特有の子育てのしやすさの要因
3-4	愛知への還元
3-5	今後の課題

謝辞

参考資料・引用文献

第1章 研究の概要

1-1 背景

1) 沖縄の貧困

「貧困」や「格差社会」が指摘される現代社会の中で、沖縄は特にその社会問題が露呈している。表 1 で示した内閣府の「こどもの貧困に関する指標（沖縄県の状況）」によると、全国平均と比べて、1 人当たり県民所得が最下位、生活保護率が 3 位、母子世帯出現率が 1 位であるなど、沖縄の貧困の実態は深刻な状況にある。また、10 代女性の出生率が全国 1 位であり、若年女性の妊娠率が極めて高い。よって沖縄の女性は、全国と比べ早期に結婚・妊娠・子育てあるいは離婚を経験しているといえる。

表 1 こどもの貧困に関する指標（沖縄県の状況）

	指標	沖縄	全国	順位
①	1人当たり県民所得(千円)	2,258	3,330	低い方から1位
②	非正規の職員・従業員率(%)	37.8	34.7	高い方から4位
③	母子世帯出現率(%)	2.2	1.2	高い方から1位
④	10代女性の出生率(%)	0.47	0.17	高い方から1位
⑤	生活保護率(%)	2.72	1.63	高い方から3位
⑥	就学援助率(%)	23.6	13.9	高い方から2位
⑦	高校中退率(%)	1.8	1.4	高い方から2位

母子世帯の収入状況(万円)	沖縄	全国
自身の年間就労収入	187	236
世帯の年間総収入	278	375

※ 沖縄県調査：「沖縄子ども調査」
/中曲\

進学率(%)	沖縄	全国	順位
高等学校等	97.5	98.7	低い方から1位
大学等	46.3	60.8	低い方から1位
専修学校(専門課程)	25.1	16.2	高い方から2位

2) 若年層の母親とアイデンティティの確立

10 代で妊娠・出産した女性は母親になっていく過程で様々な困難がある。豊田・岡本（2006）によると、「母親としての自己」と「個人としての自己」も共に確立されていない母親は、生活の中のゆとりのなさも、子育てによる閉塞感も感じており、子育てにおける充実感が得られないことが指摘されている。また、鈴木（2020）は、一人の女性が妊娠して、母親になっていくには、アイデンティティの確立が求められ、ストレスや葛藤が多くあり、サポートが必要であることを述べている。

従来の研究において、アイデンティティは青年期に獲得されるものであり、この時期に自己を見つめ直し、他者との関わりの中で改めて自己の在り方を検討することで徐々に形成されていくものだと考えられている。谷口・齋藤（2015）は、アイデンティティは、個人内領域だけでなく、他者とのやり取りである対

人関係領域を通して発達すると述べている。つまり、アイデンティティの確立において、青年期に他者と良好なコミュニケーションをとることが重要であると考えられる。

しかしながら、村越ら（2011）の調査結果から、10代で妊娠・出産した女性は、学業の中断や子どもがいることなどから学校時代の友人と話が合わないことや、10代の母親を社会の逸脱者と捉えるような、社会的偏見の素地がある上、本人達の公的な育児サービスや母親同士の交流を必要と感じていないこと、10代出産女性の実数が少なく周囲に同環境の者がいないことなどにより、10代は社会から孤立しやすいことが明らかとなっており、アイデンティティの確立に不可欠である他者との交流の機会が奪われていることが考えられる。つまり、10代で妊娠や子育てを経験している母親は十分なアイデンティティを確立することが難しい状況にある。

そこで、施設職員とのインタビューを通して、若年女性のアイデンティティの在り方とそこに対してどのような支援を行うことが効果的であるのかを検討することが必要であると考ええる。

こうして自己のアイデンティティの確立が不十分な状態で母親としての立場を強いられる沖縄の若年女性の姿から、「母親としての自分」という一種の“キャラ”を作って、自己のアイデンティティとの葛藤を乗り越えているのではないかと考えた。そこで、次に“キャラ”に関する先行研究を探ることにする。

3) キャラについて

現代の対人関係において、“キャラ”を介したコミュニケーションが多用され、アイデンティティの確立・自己意識との関連など様々な観点から研究されている。伊藤（2005）によると、『『キャラ』とは『キャラクター』から区別するために用いられる名称で、一般名として『人格』や『性格』、あるいは小説や劇、映画の『登場人物』。そして『文字』『記号』という意味を持つ” character “から区別して、” Kyara “という」のであって、「多くの場合、比較的に簡単な線画を基本とした図像で描かれ、固有名詞で名指しされることによって、あるいはそれを期待させることによって『人格・のようなもの』としての存在感を感じさせるもの」であると説明している。伊藤（2005）の説明は、基本的には商業的に創造されたキャラクターがそれを愛玩する使用者によって「人格」を付与される現象に対してなされたものである。しかし、同様のことは現代の対人関係にも通ずるものがあると考ええる。例えば、インターネットでは名前や年齢、性別を明かさず、時にはそれを偽り、同じ目的を持つ人が集い、関係が形成される。また、学校や職場などの対人関係でも、自他を「～キャラ」という形にあてはめ、自身はそれに沿った行動・言動を取るようになる者がいる。これら

は、「比較的簡単な線画」で個人を表現し、実際とは必ずしも一致しない「人格」をまとい、はじめからそのような人物であったかのように振る舞うという点で伊藤（2005）の指摘と一致する。このように、“キャラ”という言葉は単なる略語ではなく、特別な意味があることが分かる。

千島・村上（2016）は、“キャラ”を「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ」と定義している。また、土井（2009）は、キャラには、対人関係に応じて意図的に演じられる性質があると論じている。このようなことから、本研究では“キャラ”の定義を「意図的に演じている、個人に割り振られた役割・関係依存的な仮の自分らしさ」とする。

1-2 目的

沖縄の妊娠・子育てについて、沖縄の地域社会がどのような支援をしているのか、その取り組みを探る中で現状と課題を明らかにする。とりわけ、妊娠・子育ての問題に直面した際の、若年女性のアイデンティティはどのような在り方なのか、「キャラ」の形成が生じているのかといった点について、心理・社会的な面から検討する。

1-3 方法

事前に質問項目を作成し、それに沿って半構造化面接を行う。9月中旬、子育て支援センター「南風（フェーヌカジー）」と、那覇市母子生活支援センター「さくら」の2施設に訪問し、施設の方および保護者の方へのインタビューを実施する。また、那覇市役所を訪問し、那覇市の子育てに関する情報・資料集めや、職員の方にお話を伺う。

・活動スケジュール

準備期間の活動スケジュールは、以下のように設定した。

時期（月）	内容
5～6月	文献研究
7～8月	インタビュー調査の検討（予備調査）
9月17日～9月20日	現地でのインタビュー調査 ・子育て支援センター南風（フェーヌカジー） ・那覇市母子生活支援センター さくら ・那覇市役所
10月上旬	インタビューデータの書き起こし（テキスト分析）
11月～12月	データ分析と考察

第2章 研究活動

2-1 子育て支援センター 南風（フェーンカジー）

子育て支援センターとは、子育て中の保護者がそれぞれの事情に合わせて必要な支援を選択して利用できるよう、子育て親子にとって身近な保育園・認定子ども園・児童館・公民館・公共施設などの場所に開設された、子どもを遊ばせながら気軽に相談できる「ひろば」である。子育て支援センター 南風は社会福祉法人千草福祉会あやめ保育園に併設されている。対象児が 0～5 歳児で、保育園に行く気分ではない子や里帰り中の親子、県外・外国から来た親子など、登録をすれば誰でも利用可能な施設である。加えて、予約制で運営しており、一日 16 組限定で利用可能である。施設には、利用者支援専門員が常駐し、個別の育児相談・情報提供や支援の紹介などを行っている。また、このような育児相談のほかにも、子育てサークル活動や誕生会、育児講座、子育てサークル活動、季節行事、広報活動、図書の貸し出し、併設されたあやめ保育園児との交流保育を行い、特別保育事業の普及促進をしている。また、来所した親子には「お子さんの生活調査」というアンケートの記入を促し、支援に活用している。



インタビューでは、継続して利用する親子の顔色や様子の変化が明らかになった。親子が継続して施設に通うことで、はじめに子どもの顔色が変わるそうだ。最初は緊張した様子の子どもが利用の回数を重ねることで、安心した様子で施設にて過ごすことができるようになる。そのような子どもの様子を見た親が安心して過ごし、その様子を見た子どもが更に穏やかになるといった循環があるというお話を伺った。

また、職員の方から「他県と比べて知らない親子にも話しかけて助けてくれる人が多い」「公共の場で子どもが泣いていても怒る人がいない」「子育てしやすい環境にあった」という経験談や思いを伺い、沖縄県は地域全体で子どもを見守る意識が根強いことが分かった。

加えて、若年層母親が支援の入り口に立ってくれること難しさや、施設に訪れた親子だけにしか支援することができない葛藤から、Instagram などの SNS の活動に積極的に取り組まれていること分かった。SNS の活動に取り組まれた後は、「今までこんな施設があったのは知らなかった、SNS を見てきました」「施設に

来るのはハードルが高かったけど、SNSを見ていきたいと思った」などと話す親子が訪れ、以前より訪問者数が増えたという話も伺った。

2-2 那覇市母子生活支援センター さくら

母子生活支援センターとは、配偶者のいない女子又はこれに準ずる事情にある女子とその児童を入所させて保護するとともに、自立の促進のためにその生活を支援し、あわせて退所した者について相談やその他の援助を行うことを目的とする施設のことである。

那覇市の母子生活支援センターであるさくらの入所対象者は、18歳未満の子どもを養育している母子家庭で、何らかの事情で離婚の届け出が出来ない方、子育てにお手伝いが必要な方、生活の立て直しを考えている方などの、さまざまな事情や悩みを持っている方が入所している。中でも、「人生を変えたい」という思いをもって入所する方が多いそうだ。各世帯が独立した居室で生活しており、サービス内容は就労支援、生活支援、子育て支援、相談・援助の支援、アフターケアなど、さまざまな種類の支援が行われている。2024年9月の時点で19世帯55名が入所し、平均年齢は37歳、そのうち若年女性にあたる15～19歳は全体の5%、20～29歳は25%であった。

インタビューでは、施設に入所する若年女性の特徴が明らかになった。内容を以下にまとめる。

- ① 実母との関係性の脆弱化（実家がない）
- ② 世代間連鎖の明確化（10代母子の増加）
- ③ 養育能力の低下（母親自身が養育されていない）
- ④ 母親の愛着障害（精神疾患の増加）
- ⑤ 就労の困難さ（中卒、風俗）
- ⑥ DVの増加

例えば「②世代間連鎖の明確化」は、母親の実母も若くして子どもを産んでいるため、中絶という選択肢がそもそもなく、若くして子どもを産むことに抵抗がない方が多いことが分かった。また、「④母親の愛着障害」は、母親自身が子どものときにネグレクトを受けたり、または過干渉に育ったりしたことなどにより、パニック障害に繋がり、子育てを含むその後の人生に影響を与えてしまった事例を学んだ。

他にも、母親としての悩みだけでなく、1人の人としての支援についてもお



話を伺った。意見を交換し合う母親の集いや、女性としての願いを叶えるネイルボランティア、考え方のコントロールを培う SEP など、子育ての悩みだけでなく人生を支え、自立に向けた取り組みがされていた。思いを吐き出すときに涙を流す方も少なくないそうだが、泣くこと自体がストレス発散にもなるため、「泣いてもいい」と声を掛けることを、支援の時に特に大切にされていることも学んだ。

2-3 那覇市役所

那覇市役所では、妊娠期から 18 歳までの子どもがいる家庭の不安や悩み事に相談員や専門職員が相談に応じる場が設けられていた。その 1 つとして、2024 年 8 月に新設された「こども家庭センター なは」がある。ここは、子育て支援の総合窓口として機能しており、看護師や保健師、保育士など様々な専門の職員が在中し、専門的なケアや身近な人には話しにくい内容の相談などを施設内の個人ブースで個別に相談することができる。また、親子健康手帳の交付窓口が保健所からこども家庭センターなはへと変更され、妊娠から子育てまで幅広い支援を行っていることがわかった。

第3章 考察・今後の課題

3-1 母親としてではない、個としてのアイデンティティの形成の困難さ

まず、先行研究とインタビューを踏まえて、母親としてではない、個としてのアイデンティティの形成に困難を抱えているのではないかと考察した。さくらでは、若年層の母親のアイデンティティ形成が未熟であることがうかがえるような、入所者の姿を知った。子どもと離れた自由な時間を求めている人がとても多いということや、子どもを置いて彼氏と遊びに出てしまい、門限までに帰ってこない人がいるなどの事例から、子どもよりも自分を優先し、現在の思いを重視する行動が特徴としてみられる。

よって、若年の母親は、母親として未熟であり、個人のアイデンティティを追い求めている最中であることが考えられる。一方で、母親としての理想を追い求める姿もみられるという。例えば「3 歳までは保育園に預けず自分で育てたい」、「ご飯は手作りがいい」など、理想の母親像はあるものの、現実的に考えると難しく、長続きせず、理想と現実のギャップが大きい人が多いことがわかった。

これらを踏まえて、そのようなギャップを自分の中で解決するために、表面上だけでも理想に近づけ、ギャップを埋めようとする手段として、キャラを用いるのではないかと考えていた。

しかし、自分を意識的に取り繕ったり、無理に母親としての自分を作ったりするようなキャラ作りは行っておらず、南風でもさくらでも、母親はありのままの自分の姿をさらけだしていることが分かった。一方、話を伺う中で、南風では、子どもを支援員に任せて自分はソファで休む母親の姿がみられることや、さくらでは、支援員に対して自分の思いをぶつける姿がみられることを知った。

ここから、キャラという意図的に演じているものはない、例えばお疲れモード、わがままモードなど、場面・状況・相手に応じて自分を使い分けている「モード」というニュアンスのほうが近いのではないかと考えた。斎藤（2011）は、「モード」を「ある種のコミュニケーション形態が凝集された疑似人格」定義している。また、渡邊ら（2005）は「状況や相手との関係性によって変化する性格のあり方、またそのときの行動様式」と述べている。このようなことから、「モード」とは、「状況や相手によって変化する性格・コミュニケーション形態」であるといえる。加えて、意図的に演じるキャラとは違い、状況や相手に応じて無意識に切り替えていることが分かる。南風でのインタビューを踏まえて、若年の母親は、「モード」として切り替えながら無意識に自分を休めていたり、自分を発散したりして、自分の心も守りながら子育てに前向きに取り組んでいると推測される。

3-2 各施設の支援

アイデンティティの形成が困難である背景を踏まえ、母親だけでなく一人の人としての支援においては、各施設でどのような方針や考え方があるのかについて検討した。さくらでは、月に一度行われる、母親同士が意見を交換し合う母親の集いや、コミュニケーションの場作りとして企画されているティーンズマザールーム、感情や考え方のコントロールの仕方を訓練する、自尊感情回復プログラム「SEP」などを実施しており、施設がただの居場所になるだけでなく、中身の根本を改革する必要がある、それに向けた支援の実践について学んだ。一方で南風では、家庭での喧嘩話をしたり、ソファで休んだり、育児の中での疲れや不満を「モード」という形であらわにする母親に対して、子どもと無理に遊ばせず、支援員が子どもを見守ったり、母親の話し相手になったりするような支援をしていることがわかった。また、講座を開催する際には、子どもだけでなく母親が楽しめることを重視されており、母親が等身大で安心できる場所として、母親が楽しく参加できる支援がされていることを学んだ。

3-3 沖縄特有の子育てのしやすさの要因

沖縄の文化について、畠中（1990）は、沖縄の文化は「開放的」で「おおらか」である、未婚の母親などに対する偏見も少ない、できてしまったものを受

容する風土があると述べている。また、上原（2016）は、共同性は沖縄の人々の「存在生」を根拠かつ「人間の生存や生存を支える相互扶助的な関係である」という見方は依然と強いと述べており、沖縄社会は受け入れサポートするメカニズムが存在していることがうかがえる。こういった沖縄の受容性の高い風土が若年女性の妊娠率の高さや結婚・妊娠・子育てあるいは離婚を早期に経験する割合が高いことと関連していると考えられる。

実際に沖縄県で子育て経験をした、子育て支援センター南風（フェーヌカジ）職員も、「他県と比べて知らない親子にも話しかけて助けてくれる人が多い」「公共の場で子どもが泣いていても怒る人がいない」「子育てしやすい環境にあった」と話しており、地域全体で子どもを見守る意識が根強いように思われる。その背景には、大和（本土）文化と沖縄文化との特異性の問題が考えられる。沖縄文化の歴史的経緯をみると、他国の文化との衝突があり、そのたびに沖縄の「主体性」が危機にされてきた。（比嘉，2018）そのため、民衆は権力に従いつつも抗い、抗いつつも流されることによって時代を生き抜いてきた（松本，1978）。ここには民衆がひとりのみでは生き抜けぬと考えてつくりあげた組織の根源があり、今日にもこのような共同体のありようが根付いていることが考えられる。

3-4 愛知への還元

1) SNS を利用した支援方法

鈴木（2020）によると、10 代出産女性が気軽に相談したいと思っても、それができないでいる現状があることが明らかとなっており、子どもを産むことを決めた後の妊娠期の支援として、SNS を活用した 10 代の母親の妊娠期からのコミュニティづくりが必要であると考えられる。

また、アイデンティティの確立において、他者とのコミュニケーションをとることが必要であるため、若い世代が比較的に利用しやすいと感じている SNS を活用した支援を広げることで、積極的なコミュニティづくりを行うことが、子育て支援に関しても、母親自身の一人の人間としてのアイデンティティの形成において必要なことであると考えられる。

本研究の調査では、子育て支援センター 南風（フェーヌカジ）において Instagram などの SNS を見て訪問する母親が多いことが分かり、まずは存在を身近に感じてもらうことが 10 代の母親にとって子育て支援の入り口となっていることが明らかとなった。大川ら（2018）が指摘するように、スマートフォンの操作になじみがあり、仕事をしていることで平日に公的機関を訪れることが難しい若年層の母親には、こうした周知方法が有効であるだろう。よって、愛知県名古屋市においても SNS による支援をより強化することが重要であると考え

る。

○なごや子育てアプリ NAGOMii（なごみー）

妊娠、出産、子育てと切れ目なく子育て家庭をサポートするスマートフォン用の子育て支援情報提供アプリである。

検診など時期に合わせた情報、相談窓口などの子育て支援情報、休日急病診療所など緊急時のための情報の知らせや、施設や親子が集える場所などの位置と現在地からの経路検索、「赤ちゃんのお風呂の入れ方」の動画掲載などの役立ち情報の閲覧等、いつでも欲しい情報が確認できる。

また、妊婦含む18歳未満の子どもがいる市内在住の家庭に交付され、協賛店に提示すると割引などの特典を受けることができるカード「ぴよか」が、このアプリで表示し使えるようになったり、子どもの成長記録を写真やコメントとともに日記形式で保存できる機能が搭載されていたりするなど、より気軽にアプリを利用し、開く機会が増えるような工夫もされていた。



○名古屋市地域子育て支援拠点事業の SNS

名古屋市地域子育て応援拠点は、主として概ね3歳未満の子どもとその保護者、これから母親になる妊婦が気軽につどい、交流できる場のことである。積極的なコミュニティづくりを行うことが、子育て支援および、母親自身の一人の人間としてのアイデンティティ形成において大切であると述べたが、名古屋市地域子育て応援拠点では、子育て中の仲間作りや子ども同士で遊ばせたい方などの「つながる場」として大きな役割を果たす。よって、積極的に利用してもらうためにも、分かりやすく気軽に見ることができる情報を提供することが重要になってくるが、それぞれカラフルで見やすいホームページの他に、ブログや Instagram など SNS を活用している場所が多く、活動内容などの情報を簡単に、いつでも知ることができるようになっていた。

以上のようなアプリや SNS 等を活用した名古屋市の取り組みは、大川ら(2018)が指摘する、若年層母親が子育て支援サービスを利用しやすい環境作りの一環であるといえる。大川らによると、24歳以下の母親は、「子育てサービスを利用したことがない」と答えた人が、25歳以上の母親と比較して優位に低かった。理由として、子育てサービスが周知されていないことと、利用したい子育てサービスがないことが挙げられていた。

前者については、アプリや SNS によって 24 時間スマートフォンを通じた情報

収集が可能になり、子育て支援サービスの周知に有効であると考えられる。後者については、若年層の母親を対象とする事業の開催にあたって、対象者からのアクセスの良さに配慮する重要性を大川らは述べているように、アプリの施設マップにより、自宅から近い施設を簡単に調べることができるようになっていく。また施設によっては、WEB や公式 LINE といった、若年層には馴染みのある方法で、施設利用の予約が可能であった。しかし、電話または来所でしか予約ができない場所もあり、施設利用の最初の一步が遠ざかってしまう若年層もいることが推測される。問い合わせ方法には馴染みのある選択肢を増やし、できるだけ施設利用を身近に感じてもらうこと、そしてその上でまず施設に来てもらい、コミュニティ作りへのきっかけを作ることが、若年層母親支援にとって重要なのではないかと考えられる。

2) 一貫した支援体制

先述したように、那覇市では子育て支援の総合窓口として 2024 年 8 月に「子ども家庭センターなは」が新設された。専門職員による子育て相談や親子健康手帳の交付が可能となり、1 つの窓口で一貫して子育て支援を提供している。一方で、名古屋市では自治体によって保険センター、もしくは区役所で親子健康手帳の交付を行っているなど、妊娠から子育てに悩みや不安を覚えても、問い合わせるべき窓口が細分化されている。そのため、この悩みがある時はどこに問い合わせるべきなのかと混乱を招く可能性があり、支援を受けられるところまでたどり着くのに時間がかかる場合があると考えられる。よって、困っている母親を支援に繋げづらい体制になっていると考える。今後名古屋市において、縦割りの行政を改め、那覇市のような出産や子育ての支援を一貫して同じ窓口や団体で受けられる仕組みづくりを行うことが求められるのではないかと考える。

3-5 今後の課題

今後の課題として、以下の 2 点が挙げられる。

第 1 に、支援者だけではなく、母親に対しても半構造化面接を実施する必要がある。本来は沖縄での調査時、支援員に加えて施設を利用している母親にも半構造化面接の実施予定であったが、台風の影響により利用者がおらず、実施することができなかった。そのため、母親目線の意見を含めた研究をすることができなかった。よって、当事者である若年層の母親の声をもとに、当事者の困難や支援の在り方を再検討する必要があると考える。

第 2 に、沖縄の過疎地域や他県での実態と比較する必要がある。本研究では沖縄の那覇市周辺の支援施設を調査対象とした。しかし、沖縄の中でもより過

疎化が進んでいる地域や、他県での実態を調査し比較することで、本研究では検討することができなかった母親の姿や支援の糸口を見つけることができると考える。また、愛知県の若年層母親支援に還元するためにも、特に名古屋市の若年層女性の現状の焦点を当て、比較する必要がある。

謝辞

本研究活動を進めるにあたり、たくさんの方々にご支援、ご協力を賜りました。指導教員の堀尾良弘先生（教育発達学科）には、企画時から沖縄での調査、その後の研究活動まで、多大な助言とご指導をいただきました。また、学務課川島香織様、教育支援センター菊池好行先生には、調査時のアンケート内容について適切なご助言を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

妊娠や子育てを経験する若年女性についての調査では、子育て支援センター南風様、那覇市母子生活支援センターさくら様にご協力いただきました。また、那覇市役所訪問時には、子ども家庭センターなはの職員の方々にご協力いただきました。本活動を支援してくださった皆様に、心より深く感謝申し上げます。

感謝の意を込めて、謝辞とさせていただきます。

参考資料・引用文献

- ・内閣府（2024）こどもの貧困に関する指標（沖縄県の状況）

<https://www8.cao.go.jp/okinawa/3/kodomo-hinkon/shiryou/kodomo-genjou6.pdf>

（参照 2025 年 1 月 12 日）

- ・豊田史代・岡本裕子（2006） 育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の葛藤と統合—育児困難との関連—広島大学心理学研究, 6, 201-222.
- ・鈴木香菜水（2020） 10代で第一子を妊娠・出産した女性が母親になっていくプロセス—半構造化面接を通して— 創価大学大学院紀要, 41, 183-209.
- ・谷口美奈・齋藤眞（2015） 青年期におけるアイデンティティの確立と依存性の関連 愛知学院大学心身科学部紀要, 11, 35-46.
- ・村越友紀・望月善子・渡辺博・稲葉憲之（2011） 10代出産女性の現状と課題 獨協医学会雑誌, 38(1), 87-94.
- ・大川聡子・安本理抄・根来佐由美・上野昌江・竹田諒太・伊計真季・西本夕紀・池田和功（2018） 若年層母親の子育て実態と支援ニーズの特徴—24歳以下で第1子を出産した母親に焦点を当てて— 大阪府立大学看護学雑誌,

24 (1), 77-84.

- ・平安名萌恵 (2020) 「沖縄の非婚シングルマザー」像を問い直すー生活史インタビュー調査からー フォーラム現代社会学 = Kansai sociological review : official journal of the Kansai Sociological Association / 関西社会学会 編, 19, 19-32.
- ・畠中宗一 (1990) 沖縄の家族と福祉に関する一考察 年報筑波社会学, 2, 1-18.
- ・上原健太郎 (2016) 沖縄的共同性論の射程ー社会学的探求のさらなる展開にむけてー 龍谷大学社会学部紀要, 49, 19-29.
- ・比嘉佑典 (1986) 沖縄文化とパーソナリティ研究ー沖縄人間学の素描ー アジア・アフリカ文化研究所研究年報, 21, 35-47.
- ・松本健一 (1978) 共同体の論理 第三文明社
- ・名古屋市 (2023) なごや子育てアプリ NAGOMii (なごみー) について
<https://www.city.nagoya.jp/kodomoseishonen/page/0000096177.html>
(参照 2025 年 1 月 12 日)
- ・名古屋市 (2024) 地域子育て支援拠点事業
<https://www.city.nagoya.jp/kurashi/category/8-14-3-1-0-0-0-0-0-0.html>
(参照 2025 年 1 月 12 日)
- ・千島雄大・村上達也 (2016), 友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応ー中学生と大学生の比較ー, 教育心理学研究, 64, 1, 1-12.
- ・土井隆義 (2009), キャラ化する/されない子どもたちー排除型社会における新たな人間像ー, 岩波ブックレット
- ・伊藤剛 (2005), テヅカ・イズ・デッドーひらかれたマンガ表現論へー, NTT 出版
- ・斎藤環 (2011), キャラクター精神分析ーマンガ・文学・日本人, 筑摩書房.
- ・サトウタツヤ・渡邊芳之 (2005), 「モード性格」論; 心理学のかしこい使い方, 紀伊國屋書店

学生自主企画研究・活動 成果レポート

研究課題	大学生を対象としたストレス課題の現状把握と 改善に向けたカウンセリングシステムの構築
研究代表者	情報科学部 情報科学科 我妻信実
グループ 構成員	正規構成員 看護学研究科 石川 舞一, 伊藤 にい奈, 伊藤 芙久佳, 南 詩織 情報科学部 大橋 玲音, 中山怜土, 野村光 協力者 看護学研究科 金田修香, 檜物春佳, 中村莉子 情報科学研究科 坪倉和哉, 西尾優亜 情報科学部 鈴木丈慈 アドバイザー 看護学科 横山 加奈 先生

目次

1. はじめに.....	39
1.1 研究背景と目的.....	39
1.2 研究への取り組み	39
2. ストレスと睡眠に関するアンケート	41
2.1 アンケート項目	41
2.2 アンケートの実施方法.....	41
2.3 アンケート結果と考察.....	41

2.3.1	睡眠時間の理想と現実	42
2.3.2	通学場所と通学時間	43
2.3.3	睡眠不足と通学時間の関係	44
2.3.4	通学時間・睡眠時間とメンタル不調の関係	45
3.	睡眠カウンセリング AI の構築.....	46
3.1	システムの構築.....	46
3.2	評価方法.....	48
3.3	評価実験の結果と考察.....	49
4.	まとめ.....	50
	参考文献.....	51
	謝辞.....	52
	業績.....	53
	2024 Joint 13th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 25th International Symposium on Advanced Intelligent Systems	53
	NLP 若手の会 (YANS) 第 19 回ワークショップ	53
	情報学ワークショップ 2024 (WiNF2024)	53

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

若年期のメンタルヘルスは、その後の人生に大きな影響を与え、犯罪や自殺とも関連している[1]。日本では若者の自己効力感が低いことが指摘されており[2]、20代の死因の第一位が自殺であるため、若者のメンタルヘルスに対する関心が高まっている。また、大学生の約20%が抑うつ傾向を示しているとの報告があり[3]、この世代は精神疾患の好発年齢であるため、手厚いサポートが求められる。

メンタルヘルスには、睡眠、運動、食事、電子機器の使用時間、個々のクロノタイプ（朝型・夜型）などが影響を与えることが知られており[4-6]、これらの要因は生活リズムに大きく左右される。特に大学生においては、高校生とは異なる生活環境や生活パターンが存在し、通学時間がその生活リズムやメンタルヘルスに与える影響については十分に研究されていないのが現状である。

本研究では、大学生の通学時間が睡眠時間やメンタルヘルスに与える影響を解明することを目的とする。具体的には、通学時間と不安や抑うつといったメンタルヘルス指標との関連性を探るとともに、睡眠時間やクロノタイプに加え、学部や学年、アルバイトの時間、一人暮らしかどうかなど、大学生特有の要因がどのように影響するかを検討する。また、高校生に関する先行研究との比較を通じて、ライフステージや生活リズムの違いがメンタルヘルスにどのような変化をもたらすかを考察する。

これらの知見を基に、大学生の睡眠やメンタルヘルスを改善するための新たなアプローチとして、「睡眠カウンセリング AI」の構築を目指す。本システムでは、大規模言語モデルなどを用いて音声対話形式のカウンセリングを行い、利用者の生活リズムや睡眠の状況に合わせたアドバイスを提供することを想定している。さらに、3Dモデルによるアバター表現を組み合わせることで、親しみやすい対話環境を整え、利用者が相談しやすい形での生活習慣やメンタルヘルスの改善をサポートすることを期待している。

1.2 研究への取り組み

本研究の取り組み過程を表1に示す。本研究は情報科学部・研究科と看護学部・研究科の学生の共同研究である。そのためそれぞれメインのキャンパスが異なることから、基本的にはMicrosoft Teamsを用いてオンラインで会議やミ

ーティングを行った。

表 1 本研究のスケジュール

研究期間	研究内容
4～5 月	研究課題の検討 先行研究の調査 研究費の使途の検討
5 月 6 日	第 1 回全体会議（提案内容の確認）
5 月 22 日	公開ヒアリング
6 月	購入物品の選定，アンケート実施方法の検討
7 月	アンケート項目の選定， カウンセリングシステム実装の検討
7 月 2 日	第 2 回全体会議（今後の活動のタスク確認，割り振り）
8 月	カウンセリングシステムの実装
8 月 6 日	第 3 回全体会議（進捗確認，大学祭の展示内容検討）
9 月	アンケートフォームの作成， カウンセリングシステムのテスト
9 月 6 日	第 19 回言語処理若手シンポジウム（YANS）にて発表
10 月	大学祭に向けた準備
10 月 23 日	中間報告会にて成果報告
10 月 30 日	第 4 回全体会議（県大祭の準備）
11 月	実証実験で得られたデータの分析
11 月 2, 3 日	県大祭にてシステムの実証実験
11 月 9-12 日	国際会議 SCIS&ISIS にて発表
12 月	アンケートの実施
12 月 7 日	情報学ワークショップ 2024（WiNF2024）にて発表
12 月 26 日	第 5 回全体会議（アンケートデータ分析に関する検討）
1 月	アンケートの集計・分析・考察， 最終報告会の準備，成果レポートの作成
1 月 22 日	最終報告会にて成果報告

2. ストレスと睡眠に関するアンケート

2.1 アンケート項目

県大生の通学時間、睡眠時間の実態とストレスとの関係进行分析するために以下に示すアンケートをおこなった。

- 通学時間と睡眠時間に関するオリジナルアンケート
- 不安尺度 GAD-7 日本語版 2018 年版[7]
- うつ病スクリーニング尺度 PHQ-9 日本語版 2018 年版[7,8]
- 日本語版朝型-夜型質問紙[9]

アンケートは全部で 5 セクション 38 問の質問から構成されている。

- セクション 1：日頃の睡眠時間や、大学への通学にかかる時間、実家や下宿等の住まいについて
- セクション 2：GAD-7 による不安尺度のチェック
- セクション 3：PHQ-9 でのうつ病尺度のチェック
- セクション 4：朝型-夜型質問紙による普段の睡眠リズムと理想の睡眠リズムの調査
- セクション 5：学年、学部、性別の回答を収集

以上の項目について、回答を収集した。

2.2 アンケートの実施方法

アンケートは愛知県立大学の学生を対象に実施した。愛知県立大学のポータルサイトである UNIVERSAL PASSPORT の掲示板にてアンケートを掲示し、回答を得た。アンケート期間は 2024 年 12 月 2 日から 12 月 21 日である。アンケートには Microsoft Forms を使用し、選択肢や自由記述による回答を収集した。アンケートは匿名で行い、個人の特定はできないように配慮している。また、アンケートは愛知県立大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

2.3 アンケート結果と考察

アンケートは大学院を含めた全学部・学科から合計 387 件の回答を得た。その中で、自由記述に不備があった回答を除いた 364 件を有効回答とし（有効回答率 94.1%）、分析をおこなった。結果を以下に示す。

2.3.1 睡眠時間の理想と現実

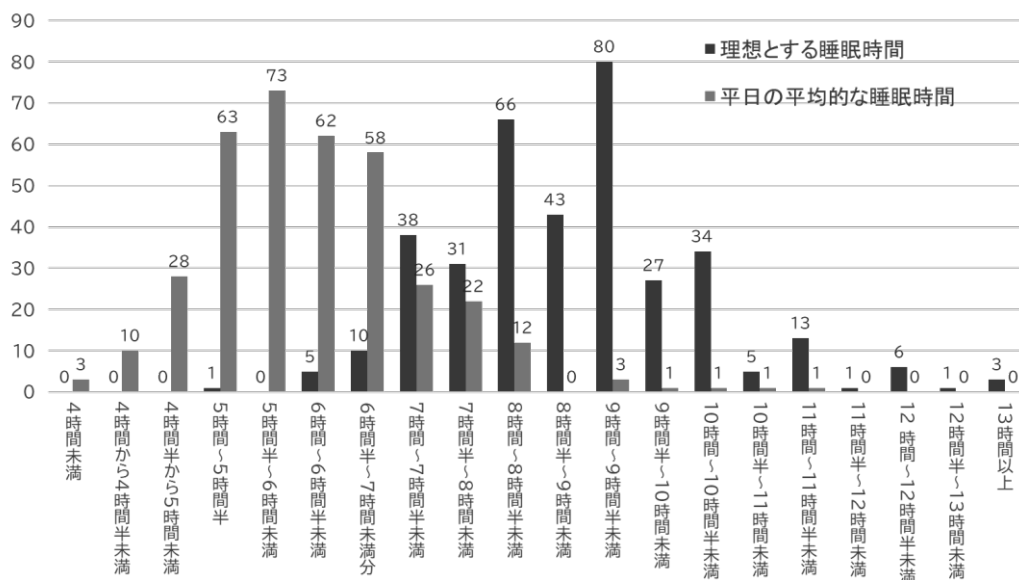


図 1 睡眠時間の理想と現実

アンケートにおいて、自分の理想とする睡眠時間と、実際にとれている睡眠時間について質問し、その回答を図 1 に示すようにグラフ化した。

理想とする睡眠時間である紺色の線は、8～9 時間付近で最大の値をとるのに対し、実際の睡眠時間であるオレンジ色の線は、5～6 時間付近が最大となっている。グラフ全体で見ても、オレンジから 3 時間ほど右にシフトしたものが紺色のグラフと一致するような分布となっている。このことから、実際の睡眠時間は、理想とする睡眠時間よりも 3 時間ほど短くなっていることがわかる。

2.3.2 通学場所と通学時間

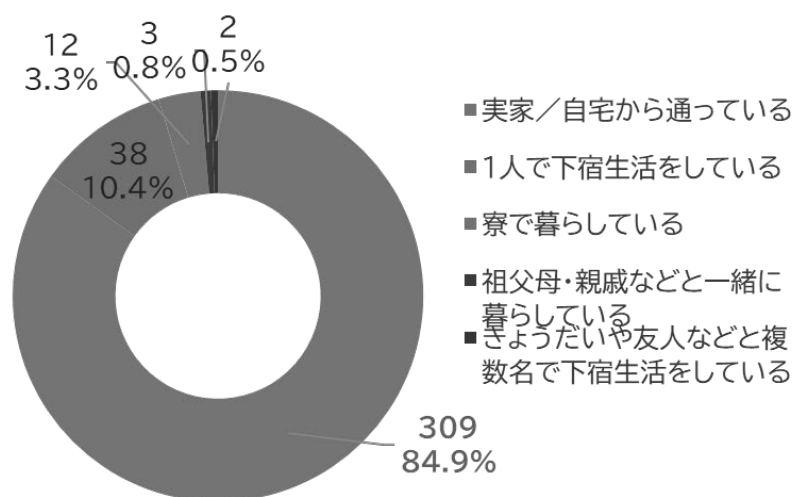


図 2 通学場所

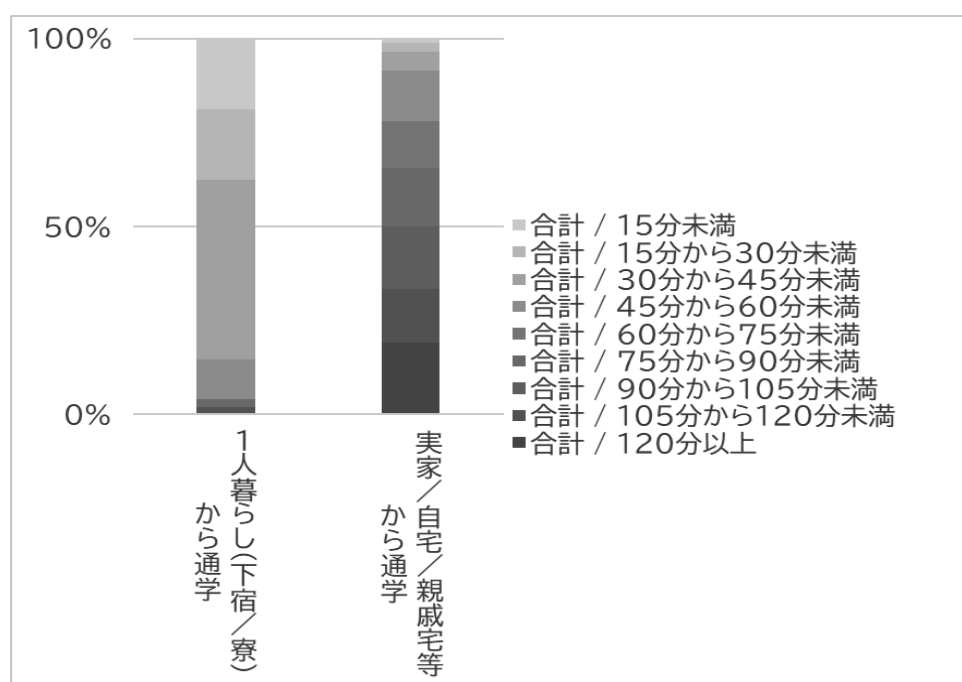


図 3 通学時間

次に、通学時間と通学場所についてアンケート結果から分析をおこなった。
図 2 を見ると、実家から通う学生が 8 割を超えており、次点でひとり暮らしの学生が 1 割ほどいるという結果が読み取れる。また、図 3 を見ると、ひとり暮

らしの学生の通学時間がおおむね 1 時間未満であるのに対し、実家から通う学生の通学時間が 1 時間を超えている割合がかなり高く、全体の 7 割ほどを占めていることがわかる。

2.3.3 睡眠不足と通学時間の関係

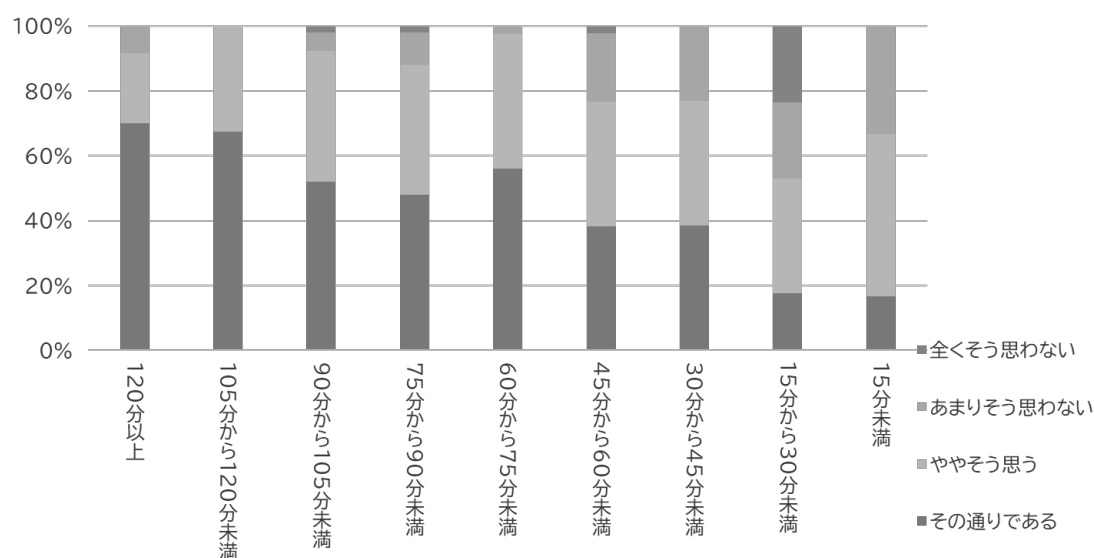


図 4 睡眠不足と感ずる度合いと通学時間

次に、平日に睡眠不足と感ずる度合いと、通学時間の関係について分析をおこなった。結果は図 4 のようになり、通学時間の短いグラフ右側の群は睡眠不足と感ずっている割合が比較的低いのにに対し、グラフ左側の通学に時間をかけている群は右側の群と比べて睡眠不足と感ずる人の割合が高くなっている。

このことから、通学時間が長くなるほど、睡眠不足感を抱く学生が増えることがわかる。

2.3.4 通学時間・睡眠時間とメンタル不調の関係

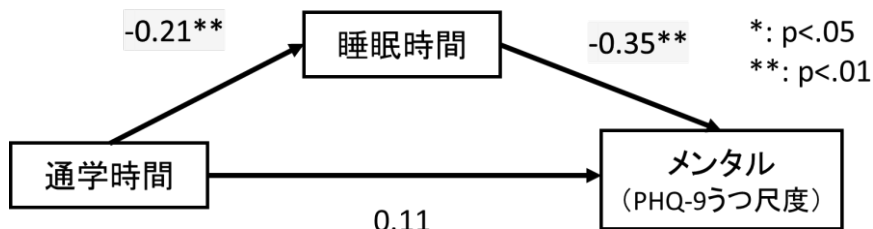


図 5 通学時間とメンタル間における睡眠時間の影響

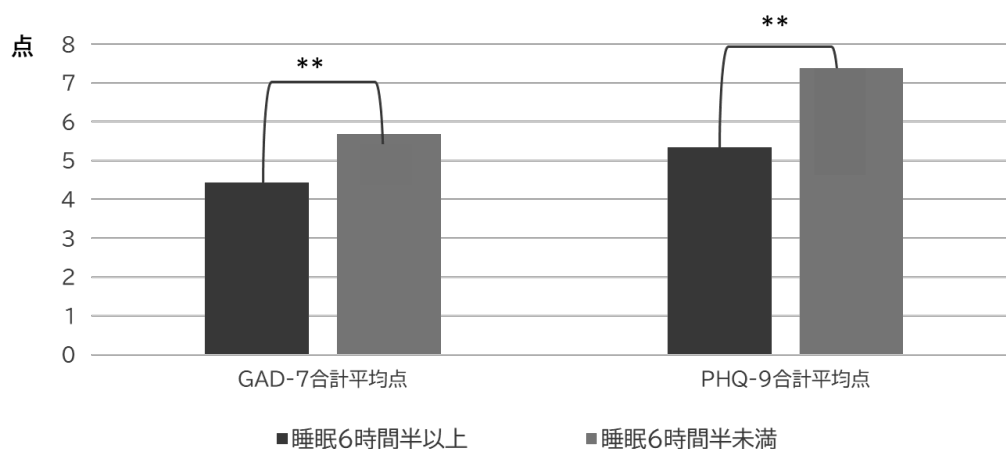


図 6 メンタルと睡眠時間の関係

通学時間と PHQ-9 で得られた結果をもとに、睡眠時間による媒介分析をおこなった。図 5 の数値は回帰係数を表しており、通学時間がメンタルに対して直接的な影響を及ぼすことは少ないが、睡眠時間を媒介することで、通学時間が長いほど睡眠時間が短く、睡眠時間が短いほどメンタルが不調になる傾向があることがわかった。p 値も 0.01 以下であったため、この結果から、通学時間は直接うつ尺度に影響しないが、通学時間が睡眠不足を引き起こすことで、睡眠時間を介してメンタルに負の影響を与えている可能性が示された。

また、図 6 では、不安尺度とうつ尺度のアンケート点数が高い（＝メンタル不調の傾向が強い）学生において、睡眠時間が 6 時間半未満の割合が、6 時間半以上の学生よりも高く、メンタル不調の傾向が強まることが示されている。

このことから、睡眠時間が 6 時間半を下回ると、不安やうつ等のメンタル不調と睡眠時間が関連を持つ可能性があるということが示された。

3. 睡眠カウンセリング AI の構築

本章では、提案する睡眠カウンセリングシステムの構築方法について述べる。本研究では、音声対話エージェントと音声またはテキストで対話し、睡眠カウンセリングが行えるシステムを構築した。構築したシステムの外観を図 7 に示す。



図 7 システムの外観

3.1 システムの構築

システムは、pixiv 社がオープンソースで公開している ChatVRM[10]を使用して作成した。このシステムは大きく分けて以下の 3 つの要素から構成されている。

1. 音声認識や合成音声を用いた声での対話
2. LLM を用いた自然言語生成
3. 3D モデルを用いたアバターの設定

ユーザーの音声認識には Web Speech API[11]を、返答文の生成には Open AI 社の大規模言語モデル GPT-3.5 Turbo の API[12]をそれぞれ用いた。また、Koeiromap API[13]により音声合成を行い出力している。プロンプトや声の調子を指定することにより、AI による特定のシチュエーションでの会話や、応答の条件付け、声

色の調整を行っている。

今回はシステム側に睡眠カウンセリングを行うカウンセラーを演じてもらうために、以下のようにプロンプトの設計を行った。また、想定される相談者の設定もシステムに与えた。

AI の設定

- パーソナリティ: 穏やかで共感力があり、睡眠改善技術に詳しい
- トーン: 力強く、役に立つ。
- 役割: 睡眠カウンセラーとしてカウンセリングを行う。
- 背景: 睡眠カウンセラーは、多忙な生活を送る方やストレスを抱える方々に対して、睡眠の質を向上させるためのサポートを行ってきた経験豊富な専門家である。日々のストレスや生活習慣に悩む相談者が、より快適な睡眠を得られるようにアドバイスを提供し、生活改善をサポートしている

相談者の設定

- パーソナリティ: 睡眠を改善する方法を模索しているが、ストレスや多忙なライフスタイルに対処していることが多い
- トーン: 睡眠の問題を心配している
- 役割: 睡眠カウンセリングを求めるクライアント

AI への指示

- あなたは「睡眠カウンセラー」としてふるまい、相談者の睡眠に関する悩みを丁寧に聞き、改善のためのアドバイスを提供してください
- 相談者が話しやすいよう、質問や提案はシンプルでわかりやすくおこなってください

このようにプロンプトを設定することで、システムがカウンセラーとして機能することを目指した。ただし、実際のプロンプトはシステムが指定する形式で記述されており、また上記に示した基本設定や指示のほかにも会話例などが含まれている。

このプロンプトを用いて構築したシステムとの対話例を表 2 に示す。

表 2 システムとの対話例

話者	発話内容
User	こんにちは
Character	こんにちは。最近の睡眠の調子はいかがですか？あなたが最近眠りが浅いと感じていることはありますか？
User	実はよく眠れていなくて
Character	それは大変ですね。よく眠ることは健康な生活の基本ですね。日中のパフォーマンスや気分にも影響しますね。どんなことが眠りを妨げているか気になりますか？
User	ストレスが原因かもしれません
Character	ストレスは睡眠に影響を与えることがありますね。ストレスが原因で眠りが浅くなることもあります。ストレスを軽減するためのリラクセス方法や睡眠改善のためのアプローチを試してみませんか？例えば、就寝前にリラクセスする習慣を取り入れることが効果的ですよ。
User	そうなんですね
Character	はい、ストレスが眠りに影響を与えることはよくあります。リラクセスする習慣を取り入れることで、心と体を落ち着かせて質の良い睡眠を得ることができるかもしれません。例えば、ストレスを軽減するために深呼吸やストレッチなどを行うと効果がありますよ。少しずつ試してみてくださいね。

3.2 評価方法

システムは愛知県立大学大学祭の参加者 79 名により体験され、その後のアンケートによって評価された。アンケートの項目は以下に示す 6 項目で、参加者は 5 段階の尺度(当てはまる, やや当てはまる, どちらでもない, やや当てはまらない, 当てはまらない)によって評価した。また、システムの感想と改善点に関しても自由記述で収集した。

- システムの会話内容は自然であった
- システムとの対話に満足した
- システムは信頼できた
- システムは適切に睡眠に関する情報を提供できた
- システムとの会話により、睡眠に対する意識が高まった
- このようなシステムがあれば、定期的に使用したい

3.3 評価実験の結果と考察

システムの評価結果を図8に示す。図8からわかるように、すべてのアンケート項目において70%以上の参加者から「当てはまる」もしくは「やや当てはまる」の評価を得た。このことから本研究で提案したシステムは、睡眠カウンセリングとして実際に有用であると考えられる。

自由回答の回答では、「的確な回答をくれた」、「睡眠について知ることができた」といった回答の有用性で好評を得ており、システムは適切に睡眠に関する情報を提供できていると考えられる。また、「返答がスムーズ」、「会話が自然」などの会話の自然さについても好評を得た。

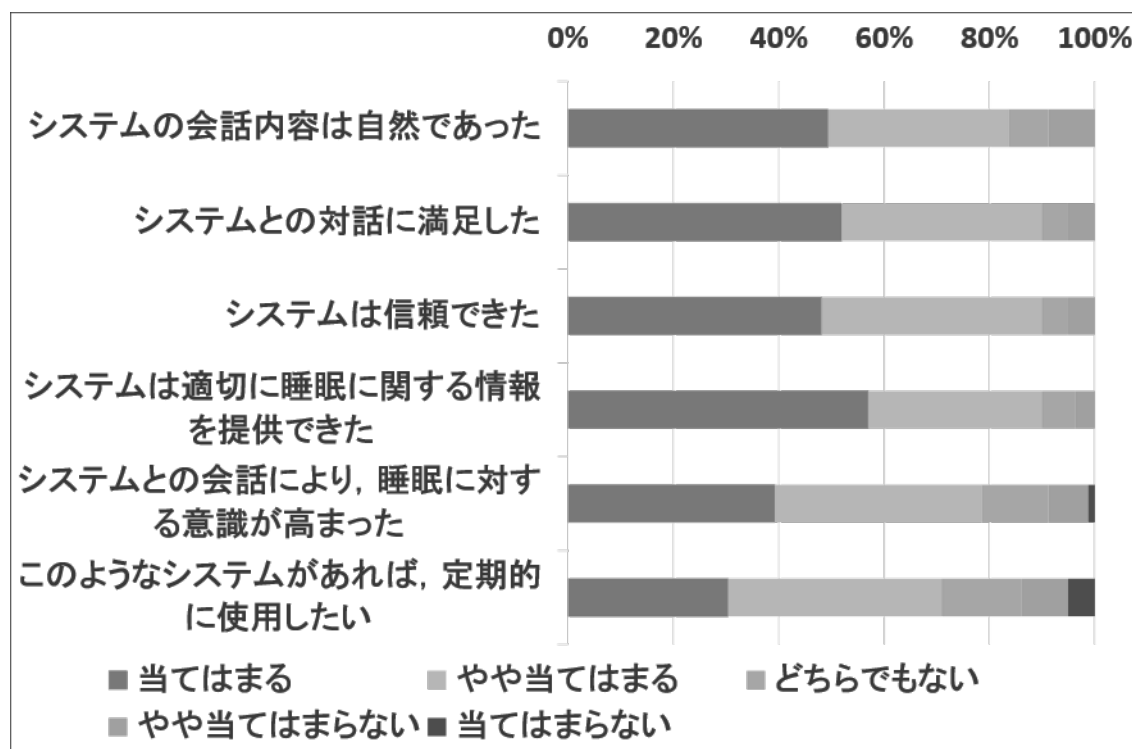


図8 システムの評価結果

4. まとめ

本研究では、大学生の通学時間が睡眠時間やメンタルヘルスに与える影響を解明することを目的とした。具体的には、通学時間と不安や抑うつといったメンタルヘルス指標との関連性を分析した。分析の結果から、通学時間は直接うつ尺度に影響しないが、通学時間が睡眠不足を引き起こすことで、睡眠時間を介してメンタルに負の影響を与えている可能性が示された。また、睡眠時間が6時間半を下回ると、不安やうつ等のメンタル不調の可能性が高まる傾向にあることを明らかにした。

また、大学生の睡眠やメンタルヘルスを改善するための新たなアプローチとして、「睡眠カウンセリング AI」の構築を行った。本システムでは、大規模言語モデルなどを用いて音声対話形式のカウンセリングを行い、利用者の生活リズムや睡眠の状況に合わせたアドバイスを提供する。実証実験を行い、システムの自然性や有用性を調査した結果、70%以上の体験者から高い評価を得た。

睡眠カウンセリング AI の設計において、睡眠時間とメンタルヘルスの分析結果を活用することは現状できていないため、今後はアンケートの分析結果をカウンセリング AI に統合し、より適切なアドバイスが行えるカウンセリング AI の構築を目指す。

参考文献

- [1] World Health Organization. World Mental Health Report: Transforming Mental Health for all, 2022.
- [2] 内閣府. 令和元年版 子供・若者白書, 2019.
- [3] 高柳茂美、杉山芳雄ほか. 大学生のメンタルヘルスの実態とその関連要因に関する疫学研究, 厚生指標(0452-6104), 64 巻 2 号, pp.14-22, 2017.
- [4] Daniel K. Hosker, R. Meredith Elkins, Mona P. Potter. Promoting Mental Health and Wellness in Youth Through Physical Activity, Nutrition, and Sleep, Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America, Vol.28, Issue 2, pp.171-193, 2019.
- [5] 亀岡聖朗, 林かおり, 齊藤敦子. 大学生の学生生活の実態と心身の健康に関する学科・学年別特徴の検討, 桐生大学紀要(2186-4748), 第 22 号, pp.65-75, 2011.
- [6] Efrosini A. Papaconstantinou, Heather Shearer, Nancy Fynn-Sackey et al. The Association Between Chronotype and Mental Health Problems in a University Population: a Systematic Review of the Literature, International Journal of Mental Health and Addiction, Vol.17, pp.716-730, 2019.
- [7] 村松公美子 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 第 7 号, p35-39, 2014.
- [8] Muramatsu K, Miyaoka H, Kamijima K et al., Performance of the Japanese version of the Patient Health Questionnaire-9 (J-PHQ-9) for depression in primary General Hospital Psychiatry. 52: 64-69, 2018.
- [9] 石原金由, 宮下彰夫, 犬上牧, 福田一彦, 山崎勝男, 宮田洋. 日本語版朝型-夜型 (Morningness-Eveningness) 質問紙による調査結果, 心理学研究, 57 巻, 2 号, p87-91, 1986-1987.
- [10] ChatVRM, <https://github.com/pixiv/ChatVRM>, (cited 2025-01-27)
- [11] Web Speech API, <https://developer.mozilla.org/ja/docs/Web/API/SpeechRecognition>, (cited 2025-01-27).
- [12] ChatGPT API, <https://platform.openai.com/docs/api-reference/chat>, (cited 2025-01-27).
- [13] Koeiromap API, <https://koemotion.rinna.co.jp/>, (cited 2024-01-22).

謝辞

本研究を遂行するにあたり，多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました．

看護学部 横山加奈先生には，本企画の発案から熱心にアドバイスいただき，研究の実施にあたり適切なご指導を賜りました．深く感謝申し上げます．

愛知県立大学学長 川畑博昭先生，教育支援センター長 菊池好行先生をはじめ，本研究を審査頂きました先生方，聴講者の皆様には，公開ヒアリング，中間報告会，最終報告会にて，適切なご助言を賜りました．感謝申し上げます．

本研究の遂行にあたり，アンケート，および実証実験に参加頂いた皆様に，感謝いたします．

業績

本研究の成果の一部を国際会議（査読付き 1 本）と国内ワークショップ（査読無し 3 本）にて報告した.

2024 Joint 13th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 25th International Symposium on Advanced Intelligent Systems

1. Shinjitsu Agatsuma, Reon Ohashi, Kazuya Tsubokura, Yua Nishio, Mai Ishikawa, Niina Ito, Fukuka Ito, Shiori Minami, Nao Takegawa, Riko Nakamura, Kana Yokoyama:
Building a Role-Play Interactive System using LLM for Health Guidance Education, Proc. of 2024 Joint 13th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 25th International Symposium on Advanced Intelligent Systems (SCIS&ISIS), Nov. 2024.

NLP 若手の会（YANS）第 19 回ワークショップ

2. 大橋 玲音, 我妻 信実, 中山 怜士, 野村 光, 石川 舞一, 伊藤 にい奈, 伊藤 芙久佳, 南 詩織, 金田 修香, 檜物 春佳, 中村 莉子, 西尾 優亜, 鈴木 丈慈, 坪倉 和哉, 横山 加奈:
LLM を用いた睡眠カウンセリング対話システムの検討,
NLP 若手の会 (YANS) 第 19 回シンポジウム, S4-P07, Sep. 2024.

情報学ワークショップ 2024 (WiNF2024)

3. 野村 光, 中山 怜士, 我妻 信実, 大橋 玲音, 西尾 優亜, 石川 舞一, 伊藤 にい奈, 伊藤 芙久佳, 南 詩織, 武川 奈央, 中村 莉子, 坪倉 和哉, 横山 加奈:
健康相談のための対話エージェントの見た目が印象評価に与える影響,
WiNF2024, P1B-11, Dec. 2024.
4. 中山 怜士, 野村 光, 大橋 玲音, 我妻 信実, 鈴木 丈慈, 石川 舞一, 伊藤 にい奈, 伊藤 芙久佳, 南 詩織, 金田 修香, 中村 莉子, 檜物 春佳, 西尾 優亜, 坪倉 和哉, 横山 加奈:
睡眠カウンセリングのための対話システム,
WiNF2024, P1B-29, Dec. 2024.



学生自主企画研究・活動 成果レポート

研究課題	愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒストリー実践 ―文化財所蔵者・地域博物館・地域住民との連携―
研究代表者	日本文化学部 歴史文化学科 氏名 笠井大稀
グループ 構成員	正規構成員 浅野七帆、井上理々、河口晋一郎 柴山香穂、清水若奈、遠山諒人、戸塚晴菜、中村優花、深谷大悟 協力者 井戸裕貴、杉江綾乃、梅村旬平 石丸真彩、谷川未来

目次

1. はじめに
2. 研究対象
3. 研究目的
4. スケジュール
5. 活動概要
 - 5.1 週一回の検討会
 - 5.2 亀山市歴史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館への訪問
 - 5.3 普門寺での活動
 - 5.3.1 普門寺での調査と準備
 - 5.3.2 もみじ祭り当日の状況
 - 5.3.3 来場者による歴史実践
6. 研究成果
7. 今後の課題
8. おわりに
9. 謝辞
10. 参考・引用文献

1. はじめに

愛知県立大学中世史では研究会昨年度までに中世以降に地域社会と密接に関わる普門寺（豊橋市）や延命寺（大府市）における文献調査及び実地調査、そして図1のような調査報告書を作成、刊行してきた。

また昨年度の活動においては、大府市歴史民俗資料館などにご支援をいただき、当館において企画展『調査された大府展』を開催した。なお展示の前で説明を行うギャラリートークも実施することで、地域住民の方々と直接交流し、地域社会史について発信した。今年度の活動はこのように私たちが蓄積してきた研究成果をさらに現代の地域社会に還元すべく、特に普門寺において人で賑わうもみじ祭り期間に調査報告会を行った。

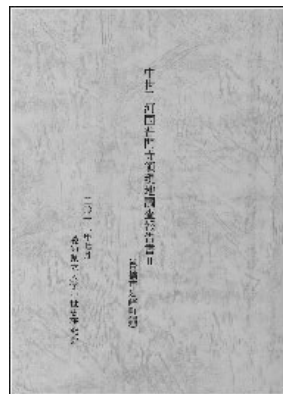


図1『中世三河国普門寺領
現地調査報告書Ⅱ』表紙

2. 研究対象

愛知県豊橋市雲谷町に所在する船形山普門寺は寺伝によると行基により神亀四年（727）に開山されたと伝わっており、豊橋市教育委員会が平成十六年（2004）より行った発掘を含む学術調査によって、裏山の船形山の山腹の元々堂址から10世紀半ばの遺物が出土する等、普門寺の成立が古代に遡ることが確実視されている。平安時代の嘉応年中（1169～1171）に比叡山に攻められ焼失し、戦国時代の天文二年（1533）にも近隣の武士同士の争いによる兵火のため再び焼失をしているが、地域社会の支えを受けて二度の焼失を乗り越えて、現在に至るまで高野山真言宗の観音霊場として信仰を守り続け、国指定重要文化財の仏像や、工芸品、古文書など貴重な歴史資料を多く伝えている。

この中でも私たちは昨年6月に県指定文化財に登録された「僧永意起請木札」と「普門寺四至注文写木札」と「三界万霊供養木札」、天文三年（1534）成立の「普門寺縁起」といった文献資料から読み取れる中世普門寺周辺の地域社会史を研究対象の中心に据えた。



図2 普門寺客殿

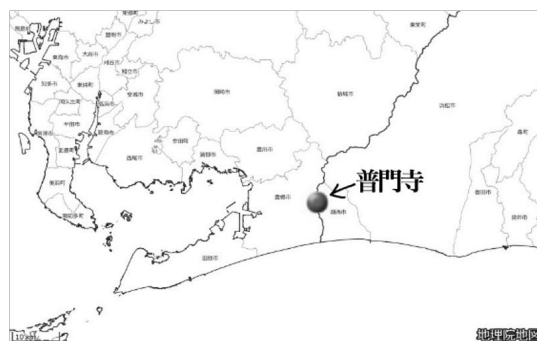


図3 普門寺の位置
（地理院地図を加工して作成）

3. 研究目的

普門寺は豊橋のもみじ寺として親しまれており、もみじ祭り（11月下旬～12月上旬）の時期は特に賑わっている。今回はこの時期に調査報告会を行い、私たちが学術的に探究してきた中近世における地域社会史を一般の方々と更に交流を深める中で共有することで“パブリックヒストリー実践”を行うことを目的とした。

パブリックヒストリーとは近年学会でも議論されている言葉であり、専門家と一般の人が同じ立場から視点を共有し、歴史に関わる実践を行うことを意味している。日本のパブリックヒストリー研究の第一人者である菅豊氏は「パブリック・ヒストリーとは、狭義には歴史学の分野で何らかの訓練を受けた人びとが、大学の研究室や教室と

いった専門的で学術的な場の「外」の社会へと飛び出して、そこで歴史学の知見や技能、そして思想を活かす幅広い実践を意味する」（菅 2019）とする一方で「過去を過去のことであり過去に留め置くのではなく、過去と現在との終わることのない対話を通じて、過去を現在に関わるものとして現在に引き戻して、さらにこれからの未来に引き伸ばして、人びとのために役立てる「現在史」である。」（菅 2019）とも表現していることから、その概念は非常に広い意味合いを含んでいると言える。そのため、今回の活動を通して愛知県立大学中世研究会としての“パブリックヒストリー”の定義を検討し実践例を示すことに挑戦した。

そして地域社会史の実像と意義を研究者からの一方向のみならず、地域の方々と一緒に双方向から探究する過程で、地域の方々に対しての還元、すなわちこれからの地域社会史の将来像に対する一つの参考が提供できると考えた。

4. スケジュール

活動のスケジュールは以下の通りである。

6～7月	普門寺の文献資料の精読と先行研究の調査
8月19日、20日	亀山市歴史博物館と琵琶湖博物館での実地調査
9月17日、18日	普門寺にて文献調査
10～11月	普門寺もみじ祭りでの学生企画に向けた準備
11月23日、24日	普門寺もみじ祭りにて学生企画「愛県大生が語る普門寺の歴史」を実施
12月～1月	最終報告の準備



図4 もみじ祭りのポスター

5. 活動概要

5.1 週一回の検討会

6 から 7 月にかけては週に 1 回研究会のメンバー全員で集まって、過去に当研究会が編纂に携わり豊橋市教育委員会が発行した『普門寺境内-総合調査編-』を参照して、普門寺が持つ文献資料を精読し、改めて普門寺の歴史的意義について確認した。その中でも図 5 の普門寺梧桐岡院縁起と今年に入り県指定文化財に登録された図 6 の僧永意起請木札は普門寺が地域社会と連携して復興した様子が記されているため、調査報告会の中でも特に重点を置いて、準備を進めた。



図 5 普門寺梧桐岡院縁起

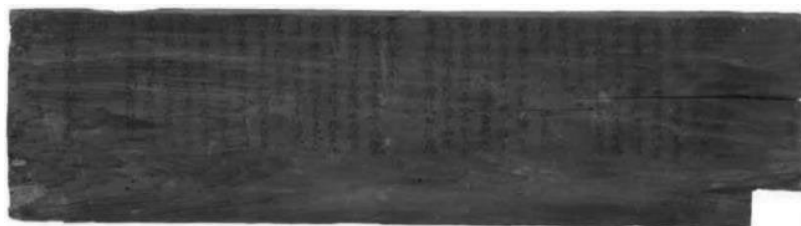


図 6 僧永意起請木札
図録『船形山普門寺』より

5.2 亀山市歴史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館への訪問

8 月 19 日に東海道の宿場として栄えた亀山宿もあり、中世からの文化財が多く残る亀山市の歴史を亀山市歴史博物館の常設展を見学して学んだ。学芸員的小林秀樹氏と中川由莉氏から地域博物館の実状や亀山市の災害時の文化財保護のあり方、博物館による地域への働きかけについてご教示いただいた。また同日に中世の民衆の生活と深く関わった東海道関宿や鈴鹿峠、櫟野寺、油日神社をフィールド調査し中世の地域社会のあり方について考察を深めた。

翌日の 8 月 20 日には琵琶湖の自然と文化をテーマに、近年リニューアルした滋賀県立琵琶湖博物館の常設展を見学した。当博物館ではサポーター制度や質問コーナーの設置など地域の人々が自主的に自然や歴史を学ぶことができる取り組みを行っており、専門家と一般の人との交流が活発に行われていることが実際に見学する中でも伺えた。学芸員の橋本道範氏からはもみじ祭りで来場される幅広い興味関心を持つ地域の方々と歴史観を共有するにあたって、自然などの専門家と一般の人の双方に共通する身近なものをきっかけにして、歴史学の視点の重要性を来場者に示していくという工夫をご教授いただいた。同日には甲賀寺跡、長命寺、大嶋神社・奥津島神社、桑実寺もフィールド調査し、普門寺と共通する古代から中世にかけての交通の要衝の山林に位置するという特徴

のある寺院の事例を学んだ。



図7 亀山市歴史博物館にて



図8 琵琶湖博物館



図9 桑実寺でのフィールド調査

5.3 普門寺での活動

5.3.1 普門寺での活動

7月28日に最初に普門寺を訪れて打ち合わせを行い、もみじ祭りの来場者の年齢層や地域を把握して調査報告会の実施方法を構想を練った。そして8月には学生企画「愛県大生が語る普門寺の歴史」の基本計画を決定し、9月17日、18日の2日間で文献調査を行うとともに展示史料と境内の客殿、収蔵庫（仏像館）、本堂の3箇所における展示レイアウトを決定した。

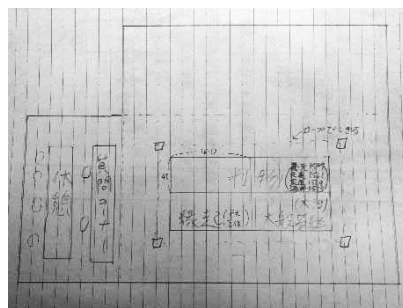


図10 展示レイアウト(客殿)

展示品の選定においては、6～7月の文献精読も踏まえて、地域社会史及び普門寺史において重要な歴史的意義を有する史料を選定した。また、展示レイアウトの決定においては、3箇所の展示会場としての特徴も踏まえて、普門寺が地域社会と密接に関わりつつ紡いできた歴史を、民衆史に主眼を置きつつそれぞれ違う立場の寺院、武士からの視点など多角的に地域社会史を捉えることができるような構成を目指した。



図11 徳川家康判物

図録『船形山普門寺』より



図12 普門寺での調査の様子

出展史料リストを以下に示す。

客殿	・普門寺梧桐岡院縁起（天文3年-1534年） ・大般若經 366 卷（大治2年-1127年） ・今川義元判物（天文18年-1549年） ・今川氏真朱印状写（永禄4年-1561年） ・徳川家康判物（永禄12年-1569年） ・酒井忠次禁制（天正13年-1585年）
収蔵庫 （仏像館）	・僧永意起請写（延宝7年-1679年） ・普門寺四至注文写（応安元年-1368年） ・黄檗版大般若經 1～20 卷（貞享元年-1684年）
本堂	・本堂并玉殿造立木札（元禄6年-1693年） ・本堂再興棟札（元禄6年-1693年）

10月から11月にかけては、境内の客殿、収蔵庫、本堂の3箇所でのキャプションと解説補助シートの作成とガイド原稿の準備をメンバーでそれぞれ分担して行った。まず収蔵庫で先程の永意起請木札に見える平安時代に寺院同士での争いで焼失をしてしまった普門寺が地域社会の支えの中で復興する歴史、客殿で戦国時代に武士の争いに巻き込まれ再び焼失をした普門寺が徳川家康など有力武将との関わりの中で必死に存続してきた歴史、そして本堂で江戸時代に地域社会の支えで建物の復興を果たし現在にも続いていく歴史をそれぞれメインテーマとして、中世普門寺が地域社会との関わりの中で2度も逆境を乗り越えてきた歴史を満遍なく伝えられるように努めた。

より多くの来場者に中世普門寺の復興の歴史が現代社会に生きる我々とも通じる部分があり、歴史は学ぶ価値があると実感してもらえるように、図のようにイラスト付きの見やすい解説補助シートなども使い要点を絞ったガイドになるよう熟考して本番に備えた。またパブリックヒストリー実践に向け来場者の方々が主体となって地域社会史を考えられるような仕組みも取り入れられるように準備を行った。

[illegible]

図 13～15 作成した解説補助シート（左から客殿、収蔵庫、本堂）

5.3.2 もみじ祭り当日の状況

当日はキッチンカーが多数出店し、バスツアーのお客さんも多くいらったこともあり、2日間で350名以上の方が（※有料の仏像館のチケット販売数より推定）展示会場に来場され、交流できた。また普門寺周辺の地域住民の方々の来場は勿論、普門寺さんのSNSや広告のお力もあり、それ以上に浜松市など静岡県側や名古屋市など愛知県の広い地域などから予想以上に多くの方々に来場していただいた。

琵琶湖博物館の橋本氏の助言をもとに準備してきた、専門用語をなるべく使わず身近なものに例えながら行う解説を実施し、こちらからも適宜質問して来場者と一緒に歴史像を考えられるようなガイドを、二人一組で各所で実行した。例えば、仏像に関心がある方に対しては、図17の収蔵庫にて普門寺の阿弥陀如来坐像が平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像と共通する特徴を持つことを伝えるときともに、「東三河でこのような仏像が作製された背景は何か」と質問をして、そこから地域社会史について考えていただき、興味を引くような解説を行った。また、徳川家康など戦国武将に興味がある方に対しては、図16の客殿にて花押など武将の意図が垣間見える筆跡について解説するとともに、「他の武士の被官にならないこと」を今川義元や徳川家康が命じていることから、戦国時代の地域住民が主体的に自らの意思に基づき仕える武士を判断していた背景を、推測し感じ取っていただけるような解説を行った。そして、地元の方に対しては、四至注文写木札や本堂再興棟札には普門寺周辺の地名以外にも豊橋市中心部の吉田や静岡県湖西市の白須賀など記されていて三遠国境を越えた交流が中世から存在していたことを主として伝えるなど、来場者の関心に合わせた柔軟なガイドを心がけた。24日の13時から15時には大学院生3名がそれぞれ「中世普門寺と源平武士-平治二年銘梵鐘をめぐって-」「中世普門寺のネットワーク」「中世普門寺と戦国期の地域社会」と題した講演会も同時に実施した。



図16 客殿のガイドの様子



図17 収蔵庫のガイドの様子



図18 本堂のガイドの様子



図19 講演会の様子

来場者からは「豊橋市にこんな歴史があるお寺があるとは発見でした」といった感想や「展示を見るだけでは分からなかったことがガイドのおかげでわかりました」といった感想など多くのご意見をいただいた。

5.3.3 来場者による歴史実践

歴史実践とは高校地歴科の「歴史総合」が重視する全ての人が行う歴史に関わるあらゆる実践を示す言葉であり、パブリックヒストリー実践はその中で狭義的な意味合いを持つ。パブリックヒストリー実践において歴史学の専門家と非専門家の双方からの歴史実践は不可欠なものであり、今回は私たちが中世普門寺の歴史を語り伝えるという歴史実践することに対応して、非専門家である多種多様な来場者が主体的に歴史実践ができるような工夫を施した。具体的には、民衆が主体となる普門寺史を参考にし来場者が自身の体験と重ね合わせられるようにするために、図20のように来場者の地元の「まんなか」にある歴史的建造物や祭り、特産品などを質問し、図21のように付箋に書いて本堂の展示横にあるコーナーの画用紙に貼っていただき、来場者の地域社会史像の表象を可視化するという工夫である。

このコーナーで中世の地域のまんなが普門寺であったことを素材として、来場者自身でそれぞれの地域で今に至るまでの歴史のまんなかは何かを考えるという歴史実践の機会を提供できた。最終的に43名の方にこのコーナーで実践していただき、浜松城や名古屋城などの城跡から名古屋港みなとまつりや豊橋祇園祭などの祭り、浜松のうなぎや焼津の鰹節など特産品に至るまで様々なものがここに書かれており、それぞれの土地柄と来場者の興味関心が多種多様であることを実際に確認できた。やはり、多くの人が集まる場所や行事が中世と現代の双方の地域社会史を象徴するものとして共通しており、地域社会の将来像をより現実的に考えるために普門寺が実際に歩んできた歴史を比較対象として学ぶことは有効だと考えた。

あなたの地元の「まんなか」 教えてください！

普門寺には、平安時代後期の12世紀以降、周辺地域の村々や住民に支えられ、住民が集い結束する地域の中心として歩んできた歴史があります。つまり、普門寺は地域の「まんなか」だったのです。
これに関連して、みなさまの地元の「まんなか」について教えてください！地元の誇れる歴史・文化・人物や、みんなが集まる場所・お祭り・行事など、地元の「まんなか」だと思うものについて、自由に書いてください！

書いて頂きたいこと

1. あなたの地元やお住まいの場所の地名
2. あなたの地元の誇れるものや、みんなが集まるものなど、「まんなか」だと思うもの
(歴史、文化、場所、行事、人物など何でも構いません)
3. 2で書いていただいたことに関する説明や思い出、エピソードなど

こちらの付箋に書いて、紙に貼ってください！



図20 来場者による歴史実践を促す掲示

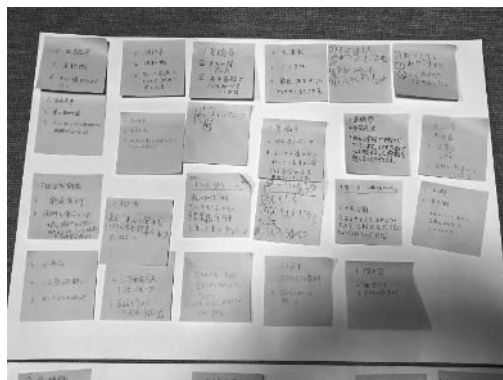


図21 来場者が各々に付箋に書いた地元の「まんなか」

6. 研究成果

まず研究成果として挙げられるのは従来歴史研究の成果を発信する場として重きを占めていた博物館などの既存の施設ではなく、寺院のもみじ祭りという歴史に普段あまり触れない層も含む多種多様な人々が来場する場で企画を実施し、歴史学の視点をより広く発信できた点である。そして私たちは大学の中でほとんどの研究活動を行ってきたが、実際に賑わう普門寺に訪れ、多くの人と交流したことで中世から現在に至るまで普門寺が三遠国境にまたがる地域社会の中で大いに役割を果たしてきたことを肌で実感し再認識できた。

また我々が研究してきた民衆史に主眼を置いた普門寺史を発信したことで、我々の重視する民衆の立場から捉える歴史学の視点と方法を、普門寺周辺だけでなくそれ以外の地域からの来場者とも共有し、それぞれ別々の地域社会史の将来像を考える上での一つの参考例として提供できたと考える。菅豊氏は「どんなに古い過去の歴史であろうと、またどんなに遠くの場所の歴史であろうと、その歴史が《いま、ここ》に生きる人びとにとって重要な意味をもっていれば、パブリック・ヒストリーの課題となり得る」（菅 2019）と述べており、私たちの民衆に主眼を置いた中世史像を、普門寺という今も変わらない歴史の現場に実際に訪れた来場者にとって重要な意味を持つように工夫して伝えて、来場者がそれぞれ地域社会史について再考するきっかけを与えられた点に今回の研究の意義があるのだと考える。



図 22 賑わう本堂の様子

以上より、本活動を通して広く開かれた歴史学を普及していくに当たって、日本中世の文献史学の視点から一つの実践例を示すことができた結論付ける。

7. 今後の課題

中世の文献史学にはくずし字や変体漢文を扱うという特徴があり、広く一般の方々と同じ立場で中世の文献史学に短期間で取り組むことには言語的な制約があると改めて浮き彫りとなった。そのため古文書など文献史料の解説が一方的になりがちで、専門家と非専門家で完全に対等な立場で地域社会史の具体的な将来像を形作る段階までは至れなかった。

今回のパブリックヒストリー実践では、まだまだアカデミックな立場から行う歴史実践の存在が目立っており、一般の方々による歴史実践が簡単なものに偏りがちであったため、今後さらに深い歴史実践の機会を提供できるように改

善点を考察していきたい。また寺院の境内での祭りということもあり展示会場が分離していたため、来場者の動線のコントロールが難しく、ガイドの時間も一回あたり5から10分程度など短時間になることが多く、用意した情報を全員に分け隔てなく伝えることは叶わなかった。そして本企画を事前に知って訪れた方は少なかったため、研究会として広報により力を入れて工夫することでさらに建設的な意見交換が可能になるのではないかと感じた。

8. おわりに

今回の活動を終えて、一般の人々が重要な意味を感じやすく専門家にも意見を言いやすい労働者の歴史など近現代史で行われることが多いパブリックヒストリーの実践を中世史において行うことの難しさを実感し、課題も多く見つかった。しかし、このような分け隔てなく人と関わることができる機会において、アカデミックな立場から、積極的に地域貢献へ挑戦すること自体が、歴史学ひいては学問を開かれたものにしていくために、大変重要な意義を持つのではないかと深く感じた。

歴史学においてアカデミックな立場からパブリックに貢献する手段として、講演会の実施や博物館など教育施設での展示企画、書籍の出版など様々な歴史実践が現在までに世界各地で行われてきているが、地域社会の中で役割を果たし歴史を刻み続けてきた現場において、本物の文化財を目の前にアカデミックな知見を多様な来場者に直接語ることで臨場感を持って伝え、交流することが可能だった今回の普門寺もみじ祭りのような機会は、特にパブリックヒストリー実践するにあたり最適な機会であったと思う。

よって今回のような直接多様な人々と交流できる活動を地道に継続していくことこそが、全ての人が平等に歴史学に関わり、現代社会の中で歴史学の知見を最大限活用することを可能にするパブリックヒストリーを実現していくために、何よりも有効な手段になると結論付ける。

9. 謝辞

本活動を進めるにあたり、たくさんの方々のご支援、ご協力を賜りました。指導教員の日本文化学部歴史文化学科上川通夫先生には計画にあたり多大な助言とご指導をいただきました。

また、普門寺住職の林義将様と前住職の林隆清様には、私たちの調査を受け入れていただき、貴重な史料の展示をご快諾いただくなど、多大なるご厚意を賜りました。もみじ祭りでの企画は、多くの一般の方々と交流し学びを得られたかけがえのない経験となりました。心より感謝申し上げます。そして、亀山市歴史博物館の小林秀樹様と中川由莉様、滋賀県立琵琶湖博物館の橋本道範様には企画

の開催にあたり貴重なアドバイスをいただきました。感謝申し上げます。最後に普門寺もみじ祭り学生企画「愛県大生が語る普門寺の歴史」にご来場くださいました皆様にも改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

10. 参考・引用文献

- ・菅豊「パブリック・ヒストリーー現代社会において歴史学が向かうひとつの方向性」(菅豊、北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門-開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019年)
- ・菅豊「パブリック・ヒストリーとはなにか？」(菅豊、北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門-開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019年)
- ・小田中直樹「いま・ここを知るため史学史を顧みる」(『歴史評論』890号、歴史科学協議会、2024年)
- ・菅豊「パブリック・ヒストリーと非専門家ー歴史実践におけるオーソリティの共有ー」(『歴史評論』890号、歴史科学協議会、2024年)
- ・『普門寺旧境内ー総合調査編ー(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集)』(豊橋市教育委員会、2016年)
- ・『普門寺と国境のほとけ』(豊橋市美術博物館、2017年)
- ・『船形山普門寺』(高野山真言宗普門寺、2017年)
- ・上川通夫「中世山林寺院の成立」(同『日本中世仏教と東アジア世界』塙書房、2012年)
- ・上川通夫「三河国普門寺の中世史料」(同『日本中世仏教と東アジア世界』塙書房、2012年)

参 考 資 料

資料 1 : 学生自主企画研究募集揭示

資料 2 : 採択グループ一覧（第二次審査結果）

資料 3 : 中間報告会プログラム

資料 4 : 最終研究発表会プログラム

2024 年度 学生自主企画 研究・活動 募集要領

大学は授業だけが学びの場ではありません。今、大学生に求められているのは、自分から問題を発見し、探究し、解決策を考える力、自分から他者に働きかける力です。そんな力をつけて県大から社会に巣立っていったほしい、との願いを込めて、今年もみなさんの自主企画研究及び活動を支援します。

自分たちの関心に応じてテーマを設定し、グループで、調査型研究（活動）や提案型研究（活動）を企画して応募してください。審査の上、1 グループ最高 25 万円まで研究・活動資金を助成します。下記の要領に従って、ふるって応募してください。

1. 応募資格

愛知県立大学生、同大学院生で構成された研究または活動グループ

- ① グループ内の学生の所属学部・学年は問いません。
- ② グループは代表者を含む正規構成員（3名～10名）と協力者（0名～人数上限なし）で構成してください。
- ③ 本学専任教員の推薦が必要です。推薦教員はグループのアドバイザーを兼ねます。

2. テーマ

● 地域連携テーマ

愛知県内又は愛知県近傍の地域の歴史や風土に関する研究・調査や地域活性化や交通機関の利用促進など、地域の課題解決に繋がる研究・調査等テーマ

● 多文化共生テーマ

在住外国人の医療、福祉、教育、雇用、言語、文化の諸問題など愛知県内又は愛知県近傍の地域のグローバル化に伴う地域社会の多言語・多文化化の進展に伴う課題などの研究・調査等テーマ

● その他、自由テーマ

上記テーマによらず、自分たちの関心に応じた自由な研究・調査・活動テーマ

授業の課題や個人の卒論・卒研・修論・博論と同じ研究、過去に採択された研究・活動テーマと同一のテーマは応募できません。

3. 助成金額

最高 25 万円（計画内容等により調整あり）

4. 採択件数

6 件程度

5. 応募方法

「2024 年度学生自主企画研究・活動計画書」（UNIPA 掲載）に必要事項を記入して、学務課に提出してください。

応募締切日 2024 年 5 月 10 日（金） 午後 5 時 厳守

6. 採択方法

① 第一次審査（書類審査）

「2024 年度学生自主企画研究・活動計画書」の書類審査を行います。

審査結果は、2024 年 5 月 13 日（月）に発表予定です。

② 第二次審査（公開ヒアリング）

第一次審査通過グループを対象に、2024 年 5 月 22 日（水）13:30～15:30 H005 教室にて公開ヒアリングを行います。

審査結果（採択グループ）は、2024 年 5 月 24 日（金）に発表予定です。

7. 公開ヒアリング審査基準

① 発表する際、以下の項目を必ず入れてください。

- 要旨
- 動機やきっかけ
- スケジュール
- 方法および場所
- 経費の内訳
- 研究・活動の結果予測

② 評価項目

問題意識、地域への貢献度、研究計画性、実行性、プレゼンテーションから総合評価します。

③ 学部 1 年生のみで構成されたグループは加点があります。

8. 研究・活動期間

2024 年 6 月 3 日（月）から 2025 年 1 月 21 日（火）まで

9. 研究・活動成果公開スケジュール（予定）

- | | |
|---|---|
| ① 中間報告会 | 2024 年 10 月 23 日（水）13:30～15:30（H005 教室） |
| 研究・活動成果の中間報告を行います。 | |
| ② 最終報告会 | 2025 年 1 月 22 日（水）13:30～15:30（S101 教室） |
| 研究・活動成果の最終報告を行います。 | |
| 審査の上、金賞（1 グループ）、銀賞（1 グループ）には賞状、副賞（図書カード）を授与します。 | |
| ③ 実施報告書（会計報告書）提出締切日 | 2025 年 1 月 29 日（水） |
| ④ 研究・活動成果レポート提出締切日 | 2025 年 1 月 29 日（水） |

10. その他

- ① 採択されたグループは、教育支援センターが開催するスキルアップ講座（6 月中旬予定）に必ず出席してください。日程は別途連絡します。
- ② 実施した研究・活動内容の中間報告を 2 回（8 月・12 月）提出してください。

問い合わせ先
長久手キャンパス 学務課（担当：川島）
TEL：0561-76-8821
Mail：gakumu@bur.aichi-pu.ac.jp

2024年度学生自主企画研究・活動 第2次審査 採択結果

番号	グループ				推薦教員	
1	田村 優奈 タムラ ユナ	教育福祉学部 社会福祉学科	名古屋市発達障害啓発プロジェクトへの協力 ー発達障害やその疑いのある社員への対応事例ー	地域連携	教育福祉学部 社会福祉学科	高柳 瑞穂
2	松村 彩楓 マツムラ サヤカ	日本文化学部 歴史文化学科	あしもとから伝える地域の魅力 ー街道の有用性と身近な歴史ー	地域連携	日本文化学部 歴史文化学科	服部 亜由未
3	山田 紗愛 ヤマダ サエ	教育福祉学部 教育発達学科	沖縄の若年女性に対する妊娠・子育て支援の取り組みと課題ー青年期におけるアイデンティティの確立と「キャラ」形成に注目して	自由	教育福祉学部 教育発達学科	堀尾 良弘
4	我妻 信実 アガツマ シンジツ	情報科学部 情報科学学科	大学生を対象とした睡眠とストレスの現状把握と改善に向けたカウンセリングシステムの構築	自由	看護学部 看護学科	横山 加奈
5	笠井 大稀 カサイ ダイキ	日本文化学部 歴史文化学科	愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒストリー実践ー文化財所蔵者・地域博物館・地域住民との連携ー	地域連携	日本文化学部 歴史文化学科	上川 通夫

2024年度学生自主企画研究・活動 中間報告会プログラム

日時：2024年10月23日（水）13:00～14:30

開催方法：○対面 長久手キャンパス H005教室

○オンライン（Zoom）<https://zoom.us/j/95108196244?pwd=xRE2Y3ixRgmrXjSfaSycFbuJAR9xlt.1>
ミーティング ID: 951 0819 6244 パスコード: 629877

プログラム：

※12:00～ H棟地下にて千種高校生徒によるポスター発表を開催

- 1. 開会あいさつ 教育支援センター長 菊池好行
- 2. 千種高校報告趣旨説明 教養教育センター長 奥田隆史
- 3. 千種高校 課外での探究活動報告

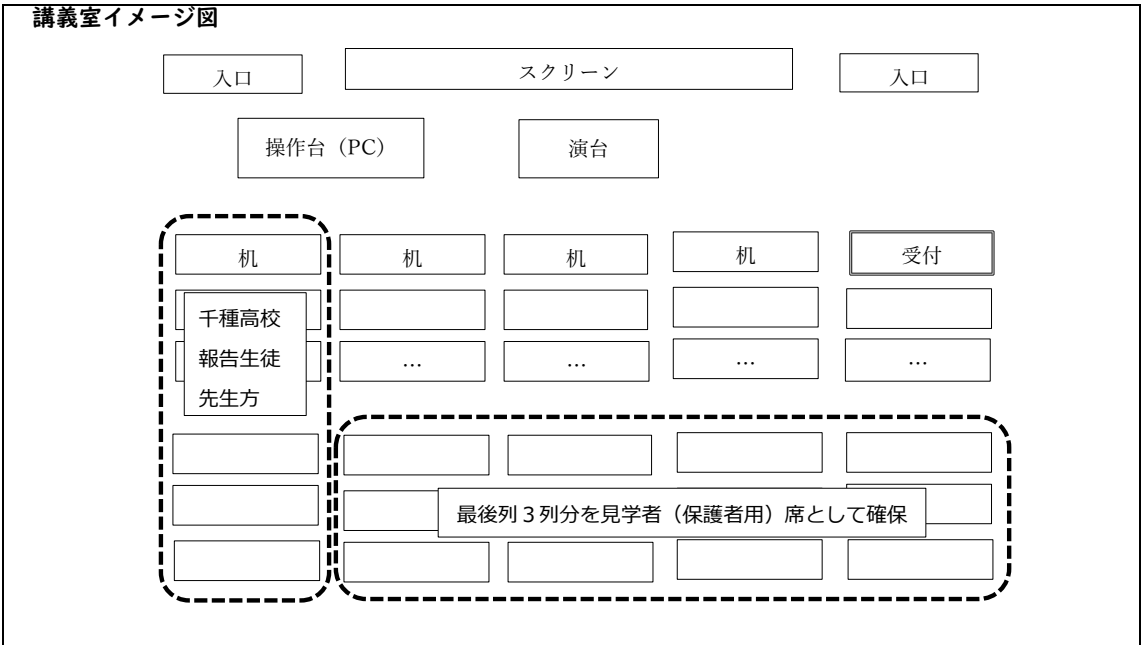
	時 間	代表者名	研究テーマ
	13:05～13:25	千種高校	社会・福祉・環境等の分野で生徒8名から報告

4. 学生自主企画研究・活動 中間報告

	時 間	代表者名	学部学科	研究テーマ	推薦教員	
1	13:30～13:40	田村 優奈 タムラ ユウナ	教育福祉学部 社会福祉学科	名古屋市発達障害啓発プロジェクトへの協力 ー発達障害やその疑いのある社員への対応事例	教育福祉学部 社会福祉学科	高柳 瑞穂
2	13:40～13:50	松村 彩楓 マツムラ サカ	日本文化学部 歴史文化学科	あしもとから伝える地域の魅力 ー街道の有用性と身近な歴史ー	日本文化学部 歴史文化学科	服部 亜由未
3	13:50～14:00	山田 紗愛 ヤマダ サエ	教育福祉学部 教育発達学科	沖縄の若年女性に対する妊娠・子育て支援の取り組み と課題ー青年期におけるアイデンティティの確立と 「キャラ」形成に注目して	教育福祉学部 教育発達学科	堀尾 良弘
4	14:00～14:10	我妻 信実 アガツマ シンジツ	情報科学部 情報科学科	大学生を対象とした睡眠とストレスの現状把握と改善 に向けたカウンセリングシステムの構築	看護学部 看護学科	横山 加奈
5	14:10～14:20	笠井 大稀 カサイ ダイイチ	日本文化学部 歴史文化学科	愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒ ストリー実践ー文化財所有者・地域博物館・地域住民 との連携ー	日本文化学部 歴史文化学科	上川 通夫

5. 講評 学長 川畑博昭

- 6. 閉会あいさつ 千種高校教頭 袴田陽士先生、教育支援センター長 菊池好行
（終了後、千種高校とのアフタートーク会）



2024年度学生自主企画研究・活動 最終報告会プログラム

日時：2025年1月22日（水）13:00開始

場所：長久手キャンパス H005教室

オンライン：Zoom（地域連携センターの協力により、録画動画を愛知県教育委員会に提供予定）

プログラム：（司会）教育支援副センター長 柴田先生

1. 開会あいさつ 教育支援センター長 菊池先生

2. 活動発表・講評・表彰

	時間	代表者名	学部学科	研究テーマ	推薦教員	
#REF!	13:05～13:20	田村 優奈 タムラ ユナ	教育福祉学部 社会福祉学科	名古屋市発達障害啓発プロジェクトへの協力 ー発達障害やその疑いのある社員への対応事例	教育福祉学部 社会福祉学科	高柳 瑞穂
#REF!	13:20～13:35	松村 彩楓 マツムラ サカ	日本文化学部 歴史文化学科	あしもとから伝える地域の魅力 ー街道の有用性と身近な歴史ー	日本文化学部 歴史文化学科	服部 亜由未
#REF!	13:35～13:50	山田 紗愛 ヤマダ サエ	教育福祉学部 教育発達学科	沖縄の若年女性に対する妊娠・子育て支援の取り組みと課題ー青年期におけるアイデンティティの確立と「キャラ」形成に注目して	教育福祉学部 教育発達学科	堀尾 良弘
#REF!	13:50～14:05	我妻 信実 アガツマ シンジツ	情報科学部 情報科学科	大学生を対象とした睡眠とストレスの現状把握と改善に向けたカウンセリングシステムの構築	看護学部 看護学科	横山 加奈
#REF!	14:05～14:20	笠井 大稀 カサイ ダイキ	日本文化学部 歴史文化学科	愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒストリー実践ー文化財所蔵者・地域博物館・地域住民との連携ー	日本文化学部 歴史文化学科	上川 通夫
6	14:20～14:25	講 評 （川畑学長） ※審査集計				
7	14:25～14:30	講 評 （古川理事長） ※審査集計				
8	14:30～14:45	表 彰 式（受賞グループ発表） ※ 終了後に集合写真				

3. 閉会あいさつ 教育支援センター長 菊池先生

【審査結果】

賞	代表者名	学部学科	研究テーマ
金賞	松村 彩楓	日本文化学部 歴史文化学科	あしもとから伝える地域の魅力 ー街道の有用性と身近な歴史ー
銀賞	笠井 大稀	日本文化学部 歴史文化学科	愛知の地域社会史をめぐる文献学研究とパブリックヒストリー実践ー文化財所蔵者・地域博物館・地域住民との連携ー